

資料集(6)

ヘラクレイトス

A 生涯と学説

生涯

1

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 1-17）

(1) ヘラクレイトスはプロソンの子。ある人によればヘラコンの子で、エペソスの人。彼は第69オリュンピア祭年〔前504・501年〕に盛年であった。彼はいずれの人にも勝って気宇高邁で高慢であり、このことは彼の著作からも窺える。彼はいう、「博識は分別を教えない。もし教えるのであれば、ヘシオドスにもピュタゴラスにも、クセノパネスにもヘカタイオス¹にも教えたはずだから。」なぜなら「知はただひとつだからである。すなわちすべてのものを通して万物を操っている神慮を認識すること。」「ホメロスは競技場から放り出され、鞭打たれるべき輩だ。アルキロコス²も同じ。」

(2) また「傲慢を消すのは火災を消す以上に急務である。」「市民は城壁を守るように、法を守るために戦わねばならない」と彼は語っていた。彼はまた仲間のヘルモドロス³を追放したことでエペソスの人々を非難攻撃して、次のようにいっている。「エペソスの連中は、成年に達した者はすべて首を縊って死ねばよいのだ。そしてポリスはこれを未成年の者に委ねたらよいのだ。彼らはヘルモドロスという自分たちの中で最も有為な人物を、われわれのもとには最も有為な人物などいなくてよい。そんな者がいるなら、他のところで他の人たちと一緒に暮らしたらよいのだといって、追放したのだから。」また彼は彼らから法を制定するよう求められたが、ポリスがすでに悪しき国制によって支配されていたので、それを無視した。(3)そしてアルテミスの神殿に退いて、子供たちとさいころ遊びをしていたが、エペソスの人々が彼の周りに集まってきたので、「悪党どもよ、何を怪訝な顔をしているのだ。お前たちと一緒に政治に携るより、こうやっている方がましじゃないか」と彼はいった。

彼は遂には人間嫌いになり、世間を逃れて、山中で草木を食料として暮らした。しかしそのために倒れて、水腫ができたので町に下り、医者たちに謎をかけて洪水から乾燥をつくり出せるかと訊ねた。だが彼らはそれを理解しなかったの、自らを牛小屋に埋めた。それは牛の糞の熱で水分が発散されることを期待してである。しかし何の効果も得られず、そのようにして彼は60歳でその生涯を終えた。

彼に寄せるわれわれの一片はこうである。

しばしばわたしはヘラクレイトスに驚嘆したものだった。一体どのようにして

彼はあのような不幸な人生に耐え通し、そして死んだのか。

なぜならその体を水浸しにした悪しき病気が

その眼の光を消し去り、暗闇をもたらしたのだから。

(4)彼は医者たちに、誰か腸を空にして液体を吐き出すことはできないかと訊ねたとヘルミッポス⁴はいう。それはできないと彼らが答えると、自らを太陽にさらさせ、牛の糞を塗りつけるように子供たちに命じた。そしてそのようにして長々と横たわったまま翌日死亡し、アゴラに埋葬されたという。キュジコスのネアンテス⁵は、彼は牛の糞を取り去ることができずにそのままの状態であって、姿が変

わっていたことから彼とは気付かれず、犬の餌食になったという。

(5)彼には子供の頃から驚くべきところがあって、まだ若くして「何も知らない」といっていた。とはいえ、成人となつてからは、「すべてを知ってしまった」と主張した。彼は誰の弟子にもならなかった。むしろ自分を探求し、すべてを自分から学んだと彼は語っている。だがソティオン⁶は、ある人の話として、彼はクセノパネスからは学んだと伝えている。またアリストン⁷が『ヘラクレイトスについて』において、ヘラクレイトスは水腫からは癒されたが、別の病気で死んだと語っていることもソティオンは伝えている。ヒッポボトス⁸もまたそのようにいう。

彼のものとして流布している書物は、ひとまとめにすれば『自然について』であるが、『万有について』『政治論』『神学論』の三つの論に分かれていた。(6)彼はそれをアルテミス神殿に奉納した。またある人によると、力ある者しかそれに近づかないように、そして通俗性から取るに足りないものと思われることのないように、彼はそれをわざと不明瞭に書いたとのことである。ティモンもまた次のようにいって、そのことを裏書きしている。

彼らの只中にカッコウのような鳴声を立てる民衆誹謗家、

謎のように語る人、ヘラクレイトスが跳び出した。

彼が、ある部分は中途半端で、ある部分は一定しないものを書いたのは、彼の憂鬱性によるとテオプラストス⁹はいう。だがアンティステネス¹⁰は、『哲学者の系譜』において、彼が王位を兄弟に譲ったことを彼の気宇高邁さを示す証拠として述べている。彼の著書は、そこからヘラクレイトス主義者と呼ばれた人たちの一派が生まれたほど大きな名声を獲得した。

(7)一般に彼の考えるところはこうである。万物は火から形成されており、また火へと解消される。すべては運命にしたがって生成し、諸存在は相反する傾向によって調和している。また万物は魂と神々に満ちている。彼はまた宇宙の中で生起する一切の事象について語っており、太陽は見えている程度の大きさであるという。また次のようにも語っている。「どこまで行こうと、またどの道を辿ろうと、君は魂の限界を見出すことはないであろう。それほどにも深いロゴス〔理〕をそれは有するのだ。」また自惚れは気違いであり、視覚は偽であると彼は語っていた。その著作において彼の語るところはしばしば輝かしく、また明快であって、鈍感な者でも容易に認識し、魂の高揚を得るほどである。また彼の命題の簡潔性と荘重さは比類なきものがある。

(8)学説の個々にわたる点は、彼の場合は以下のごとくである。火が元素であり、万物は火の交換物である。それらは稀薄化と濃縮化とによって生じる。だが彼はこれらについては何ひとつ明快に説明していない。すべては対立によって生じ、全体は川のごとく流れる。万有は限定されており、世界はひとつである。それは火から生まれ、また再び一定の周期で火に還元されるが、その総体は永遠である。このことは運命によってなされる。対立するものの一方は生成へと導くものであり、戦いと争いと呼ばれ、他方は火へと導き、和合と平和と呼ばれる。これらの転化は「上り道」と「下り道」と呼ばれるが、これらの道によって世界は生成してくるのである。

(9)すなわち火が濃縮化され、凝縮すると水分が絞りだされ、水が生じる。そしてそれが凝結すると土に転じる。これが下り道である。また逆に土が弛むと、そこから水が生じ、そしてそれから自余のものは生じる。彼はほとんどすべてを海からの蒸発に帰している。これが上り道である。蒸発は大地からも海からもなされる。一方は明るく清いが、他方は暗い。火は明るいものによって養われ、水分はもう一方の〔暗い〕ものによって養われる。包むものがどのようなものか、彼は明らかにしていない。とはいえ、そこには窪んだ方をわれわれの方に向けた諸々のボール〔鉢〕のようなものがあり、その中に明るい蒸発物が集まると炎が生み出されるという。それらが諸星である。(10)太陽の炎は最も明るく、最も熱い。なぜなら他の諸星は大地からより遠く隔たっているからであり、それゆえ照ら

すのも暖めるのも弱いのである。月は地面にかなり近いが、清らかな場所を運行していないゆえに「太陽ほど明るくも、暖かくもない」。その点太陽は透明な混じりけのないところを運行しており、またわれわれからほどよい距離を保っている。それゆえそれはより一層暖め、照らすのである。太陽や月が蝕を起こすのは上層のボール〔鉢〕状のものが回転するためである。月の月毎の相はその中でボール〔鉢〕状のものが少しずつ回転することによって生じる。昼と夜、月と一年の季節、年、雨や風などといったものは、種々異なる蒸発物によって生まれる。(11)すなわち明るい蒸発物が太陽の輪の中で点火されると昼を造り出し、反対の蒸発物が支配的となると夜を生み出す。また明るいものから熱が増大すると夏を造り出し、暗いものから水分が過剰になると冬が造り出される。またその他のものについても、彼はそれぞれに応じてその原因を語っている。だが大地については、それがどのようなもので、また何であるか、彼は明確に述べていないし、またボール〔鉢〕状のものについても述べていない。以上が彼によって考えられたところである。

アリストンの語っているソクラテスにまつわる話、またヘラクレイトスの著作に出会ったとき（それをソクラテスのもとにもたらしたのはエウリピデスであるが）、ソクラテスがいったといわれることなどについては、「ソクラテスについて」の項で述べた。(12)しかし文法家のセレウコス¹¹のいうところによれば、その本を初めてヘラスにもたらしたのはクラテス¹²なる人物であって、彼が「その中でも溺れ死なないようなデロスの潜水夫が必要だ」といったのだと、あるクロトン人が『潜水夫』なる書物の中で伝えているとのことである。ある人はその本に『ムーサ』なる表題を与え、別の人は『自然について』という表題を与えている。だがディオドトス¹³はそれを『人生航路に対する誤りなき舵取り』と呼び、他の人は『品性の指針』とか『万人の振る舞い方の一秩序』と呼んでいる。また彼は「なぜ黙っているのか」と訊ねられたとき、「君たちに喋ってもらうために」と答えたといわれる。ダレイオス¹⁴もまた彼と識り合うことを望み、彼に次のような手紙¹⁵を書いた。

(13)「ヒュスタスぺスの子、王ダレイオスよりエペソスの賢者ヘラクレイトスに挨拶を送る。

貴殿は理解するに難しく、解明するに困難な『自然について』なる書物をお書きになられた。ところでこの書は、ある部分では、貴殿の言葉を逐語的に解釈するとき、全世界とその中で生じている事柄の、そしてまさにそれらは神的な運動の内に置かれているということの、ある種の力ある考察を含むように思われる。だが大部分については判断は停止されるのであって、書物に最も広汎に通じている者ですら、貴殿のもとに書かれている事柄の正しいと思われる解釈は何かということで、ほとんど途方に暮れているような次第である。そこでヒュスタスぺスの子、王ダレイオスは貴殿の講義とギリシアの教養に与りたいと思う。可及的速やかにわが眼前に、わが王宮にこられたし。(14)というのも、ギリシア人というのは大抵は知者を識別しえない連中であって、優れた聞き取りや学習のために知者たちによって立派に提言されていることを看過するからである。その点わがもとにはあらゆる特権が貴殿に用意されているし、また日々、うるわしく真剣な討論や貴殿の忠告にも合致した誉れ高い生活が営まれているのである。」

〔ヘラクレイトスの返書〕

「エペソスのヘラクレイトスよりヒュスタスぺスの子、ダレイオス王に御挨拶申し上げます。

かりそめにこの地上に存在しているあの者どもはすべて真理からも正しい振舞いからも離れ、愚かな無分別のために食欲と名声の渴望に専心しております。だがわたくしは悪意といったものはすべて忘れてしまっており、また嫉みと密接に結ばれている飽食は、これを避けることにしております。そして驕慢に取り巻かれることが懸念されますので、ペルシアには参ることができません。わたくしの見解によれば、わずかなもので足りますので。」

王に対してすら彼はかくのごとき男であった。

(15)デメトリオス¹⁶は『同名人録』において、彼はアテナイ人を見下していたが、アテナイ人からは極めて高い評価を得ていたという。そしてエペソスの人々から軽んじられていたが、むしろ自国の方を大切にしたいということである。パレロンのデメトリオス¹⁷も『ソクラテスの弁明』において彼に言及している。彼の著作に注釈を加えた人は極めて多い。アンティステネス¹⁸とポントスのヘラクレイデス¹⁹、ストア学徒のクレアンテス²⁰とスパイロス²¹、さらにヘラクレイトスの追従者と呼ばれたパウサニアス²²、ニコメデスとディオニュシオス²³、それに文法家の中ではディオドトスがいる。このディオドトスは、ヘラクレイトスの著作は自然に関するものではなく、政治に関するものであって、自然に関する部分は例証の形で置かれているに過ぎないといっている。

(16)イアンボス詩人のスキュティノス²⁴がヘラクレイトスの論文を韻文にしようとしたとヒエロニュモス²⁵はいつている。多くのエピグラム〔碑銘詩〕が彼に捧げられており、次ののもそうである。

余はヘラクレイトスなり。なぜ余を揚げたり下げたりするのか、

無教養な者どもよ。

余が骨折るは汝らのためならず、余を理解する者のためなり。

余にとってはひとりの人間でも三万人に匹敵する。無数の大衆は

無に過ぎぬ。ペルセポネ²⁶のもとにおいてもまた、余はかく語る。

また次のようなものもある。

急いでエペソスのヘラクレイトスの書物のど真ん中にいたろうなどとはするな。

道は汝にとり通るに極めて困難であろう。

そこには暗黒と光りなき闇が存するなり。だがもし秘儀に通ぜし者が汝を導き入れるならば、

その道は明るき日輪よりも明らかとなるう。

(17)ヘラクレイトスという人は五人いた。第一は彼自身である。二人目は抒情詩人であって、12神の頌歌は彼の作品である。第三はハリカルナッソスのエレゲイア詩人であり、カリマコスに彼に寄せて次のような詩を作っている。…… 略 …… 第四はマケドニア史を書いたレスボス人。第五はキタラ弾きからそういったものに転身した道化師。

- 1) ミレトス出身の歴史家、地理学者。前500年頃。『世界周遊記(ペリエゲシス)』を著した。
- 2) 前7世紀の中葉に活躍した大叙情詩人。ピュタゴラスの章5の注1参照。
- 3) エペソスの法律解釈者。エペソスを追放された後、ローマにいたり、ローマ法の祖となったといわれる半ば伝説的人物。
- 4) 前3世紀後半の伝記作家。スミュルナの人。タレスの章A1の注36参照。
- 5) キュジコス出身の歴史家。前3世紀の人。ピュタゴラスの章8の「クレメンス」の注4参照。
- 6) アレクサンドリア出身の前3世紀のペリパトス派の哲学者、歴史家。『哲学者の系譜』を著す。
- 7) キオス出身のストア派の哲学者。ゼノンの弟子で、前3世紀中頃の人。もうひとりペリパトス派にも「ケオス島出身のアリストン」と呼ばれる哲学者がいるが、同一人物か。
- 8) 生涯、年代共に不詳の著述家。ピュタゴラスの章8の「クレメンス」の注1参照。
- 9) レスボス島エレイソス出身のペリパトス派の哲学者。リュケイオンの2代目の学頭。タレスの章B1の注1参照。
- 10) タレスの章A1の注44参照。
- 11) アレクサンドリア出身の文法学者。ローマのティベリウス帝〔紀元14－37年〕の宮廷に仕える。
- 12) この「クラテス」については不詳。有名なキュニコス派の哲学者のクラテスではなかろう。

- 13) シドンのディオドトスか。シドンのディオドトスであれば、ペリパトス派の哲学者であるが、年代等是不詳。
- 14) ペルシア大王。前522－486年在位。ギリシアのアッティカに侵攻するも、マラトンの戦いに敗れて撤退。第1次ペルシア戦役(前490年)。
- 15) これらの手紙も偽書。
- 16) マグネシアのデメトリオス。タレスの章A1の注42参照。
- 17) パレロンのデメトリオスについては、タレスの章A1の注3参照。
- 18) おそらく「ヘラクレイトス派のアンティステネス」と呼ばれる人物であって、キュニコス派のアンティステネスではないであろう。しかしヘラクレイトス派のアンティステネスについては、そういう人物がいたということ以外不明。
- 19) タレスの章A1の注14参照。
- 20) ストア派の哲学者でストアの第2代目の学頭。ゼノンの弟子。前331－232年。
- 21) 前3世紀のボスポロス地方出身のストア派の哲学者。ゼノンおよびクレアンテスの弟子。クレオメネス3世の招きに応じてスパルタを訪れ、スパルタの国政改革に参画した。
- 22) 世にパウサニ阿斯と呼ばれる人は多いが、このパウサニ阿斯については、ヘラクレイトスの徒という以外、不詳。
- 23) この両名とも、ヘラクレイトスの徒という以外、不詳。
- 24) テオス出身の前4世紀のイアンボス詩人、諷刺詩人。ヘラクレイトスを詩の形にした。
- 25) ロドスのヒエロニュモス。タレスの章A1の注15参照。
- 26) 冥界の王ハデスの妻。冥界の女王。

1 a

『スーダ』（「ヘラクレイトス」の項）

ヘラクレイトスはブロソンないしはバウトルの子。別の人によればヘラキスの子で、エペソスの人。自然哲学者。彼は「暗い人」と呼ばれた。彼はどんな哲学者の弟子ともならなかった。生れつきの本性と精励によって修練したのである。彼は水腫に罹ったが、医者たちが彼を治療しようとしたその仕方には自らを委ねず、牛の糞を全身に塗って太陽によって乾かされるにまかせた。そのようにして横たわっていたところ、犬がやってきてばらばらにした。だが別の人たちは砂に埋めてもらって死んだのだという。ある人々は、彼はクセノパネスとピュタゴラス学徒のヒッパソス¹には学んだと主張している。第69オリュンピア祭年〔前504-501年〕、ヒュスタスペスの子ダレイオスの時代²に彼は生きた。そして多くの著作を詩の形で書いた。

- 1) 前5世紀初頭のピュタゴラス派の哲学者。ピュタゴラスの章19の注2参照。
- 2) ダレイオスの治世は前522－486年。

2

ストラボン（『地理書』XIV 3,632.633）

アイオリスの植民の後のことであるが、アテナイ王コドロス¹の嫡子アンドロクロスがイオニアへの植民を指導し、エペソスの建設者になったと彼〔ペレキュデス〕はいう。それゆえにその地にイオニアの王宮が置かれ、今日にいたるもなおその一族の後裔が王と呼ばれ、競技場における最前列の席、王族の印たる紫衣、王杓に代わる杖、エレウシスのデメテルの供儀といった一定の榮譽を保持しつつ

けているのである。

- 1) メッセネからアテナイにきてテセウス王家に代ってアテナイの支配者になった半ば伝説的なアテナイ王。彼の生涯はドリス人との戦いであったが、「コドロスを殺さずにおれば、アテナイ人に勝利しよう」というドリス人に降されたデルポイの神託のことを聞き、樵に変装して自らを殺させることによってアッティカの土地をドリス人から守った。彼の王家は前8世紀にアテナイの統治権が執政官に移るまでつづいた。

3

クレメンス（『雑録集』I 65）

なぜならヘラクレイトスは僭主メランコマス¹を説得して、その支配権を捨てさせたからである。またダレイオス王がペルシアに招聘したが、それを無視した。

- 1) 不詳。

3 a

ストラボン（『地理書』XIV 25,642）

この町〔エペソス〕からは注目すべき人々が出たが、古人の中では「暗い人」と呼ばれたヘラクレイトスとヘルモドロスがいる。このヘルモドロスについてヘラクレイトスは次のようにいっている。「エペソスの連中は、成年に達した者は首を縊って死ねばよいのだ。彼らはヘルモドロスという自分たちの中で最も有為な人物を、われわれのもとには最も有為な人物などいなくてよい。そんな者がいるなら、他のところで他の人たちと一緒に暮らしたらよいのだといって、追放したのだから。」この人〔ヘルモドロス〕はローマ人のためにある法律を起草したように思われる。

プリニウス（『博物誌』XXXIV 21）

また十人委員会が起草し、公費で捧献されたエペソスの法律解釈者ヘルモドロスの立像も集会所にあった。

3 b

テミスティオス（『徳について』40〔シリア語文書のドイツ語訳より。*Rh.Mus.*27,1872, 456f.〕）

エペソス人たちは贅沢な生活と楽しみに慣れていて、戦争が起こり、ペルシア軍が彼らの町を重包囲下に置いたが、それでも彼らはいつも通り楽しんでいて、しかしやがて生活必需品が町から不足し始め、飢餓が彼らの上に重くのしかかってきたとき、市民たちは暮らしを破綻させないためにはどうすべきか協議するために集まった。それでも贅沢を制限すべきだと忠告する者は誰もなかった。市民のすべてが集まって協議していたとき、ヘラクレイトスという名の男がひき割り麦を取って、それを水と混ぜ、一座の人々の中に坐って食べた。これが全国民に対する暗黙の教えとなったのである。エペソスの人々はただちにその指針に気付く、それ以外の指針は必要としなかったと、その歴史は語っている。すなわち彼らは食料品を減らさないためには贅沢を幾分減らさねばならないことを悟ったのである。彼らが普通に暮らすことを学び、ヘラクレイトスの忠告にしたがった食事をしているということを聞いて、敵は包囲を解いて町から去った。彼らは武器によっては勝利者であったが、ヘラクレイトスのひき割り麦の前に敗退したのである。

プルタルコス（『饒舌について』17,511 B）

なすべきことを言葉によってではなく、印によって示す人たちこそ特に称賛され、賛嘆されるのではなかろうか。ちょうどヘラクレイトスが協調ということについて何らかの見解を語るように市民たちから求められたとき、演壇に上り、冷水の入ったコップを取って、それをひき割り麦の上に注ぎかけ、メグサハッカで掻き混ぜて飲み干し、立ち去ったように。そのことによって彼は市民たちに、手近かにあるもので満足し、高価なものを求めないことが国家を平和と協調の内に保つことを示したのである。

著 作

4

アリストテレス（『弁論術』Γ 5. 1407 b 11）

一般に書かれたものは読みやすく、かつ分かりやすくなければならない。このことは同じことである。接続詞が多いもの、またヘラクレイトスの文章のように区切るのが容易でないものは、このことに欠ける。なぜならヘラクレイトスの文章は〔句読点を〕どちらに付けたらよいのか、後の方に付けたらよいのか前の方に付けたらよいのか明らかでないために、区切るのが厄介だからである。例えば彼の著作の劈頭に語られている文章がそうである。彼は次のようにいう。 τοῦ λόγου τοῦδε εὐνοτος ἀεὶ ἀξύνετοι ἀνθρώποι γίγνονταί (「ロゴスはこの通りのものとして常にあるのだけれども、人間どもはこれを理解しない。」あるいは「ロゴスはこの通りのものとしてあるのだけれども、常に人間どもはこれを理解しない。」) すなわち ἀεὶ [常に] をどちらに付けたらよいのか明らかでないのである。

デメトリオス（『文体について』192）

明快さはより長い文の内にある。第一に主文の内に、次に従属文の内に。連結されていない文やばらばらの文は、すべて全体としてはっきりしない。なぜならヘラクレイトスの文章がそうであるように、各々の詩句の最初が切り離されると、不明瞭となるからである。切り離しが〔文章〕の大部分をそのように暗いものにするのである。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』II 22）

エウリピデスがヘラクレイトスの著作を彼〔ソクラテス〕に手渡して、「どう思う」と訊ねたところ、彼は「分かったところはすばらしかったし、また分らなかったところもそうだと思う。ただこれはデロスの潜水夫を必要とするね」といったといわれる。

学 説

5

アリストテレス（『形而上学』A 3. 984 a 7）

メタポンティオンのヒッパソス¹とエペソスのヘラクレイトスは火を原理とする。

1) ピュタゴラスの章19の注2参照。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』23,33）

メタポンティオンのヒッパソスとエペソスのヘラクレイトスも一なるものを立て、彼らもまたそれを運動し限定されているとする。しかし彼らは火を原理とした。そして火から濃縮化と稀薄化によって諸存在を造り出し、また再び火へと解消している。すなわちそういったひとつの自然〔火〕を基体としてである。というのも、すべては火の交換物であるとヘラクレイトスはいうからである。また彼は、世界の転化にはある必然的な運命によって一定の秩序と定まった時があるとする。

アエティオス（『学説誌』I 3,11 [Dox.283]）

ヘラクレイトスとメタポンティオンのヒッパソスは万物の原理を火であるとする。なぜなら火から万物は生成し、また火へと万物は終息すると彼らは語っているからである。火が消えることによってすべては世界へと構成されるのである。すなわち、まず最初に火の最も密なる部分が自らの内へと縮まることによって土が生じ、次に土が火の本性によって弛むことによって水が生み出される。そしてそれが立ち昇ることによって空気が生じるのである。だが再び世界と全物体は火によって万有の火化〔世界大火〕に還元される。

ガレノス（『ヒポクラテスによる元素について』I 4 [I 443 K.23,1 Helmr.]）

他方の人々は火を立て、同じように、それから集合し濃縮化されることによって空気が生じ、さらにその状態がより一層、より激しく圧縮されると水となり、最大限濃縮化されると土が造り出されるとしており、彼らもまたそういったもの〔すなわち火〕を元素であると推論しているのである。

6

プラトン（『クラテュロス』402 A）

ヘラクレイトスはどこかで「万物は流転し、何ものもとどまらない」と語り、そして諸存在を川の流れに譬えて、「君は同じ川に二度足を踏み入れることはできないであろう」といっているね。

アエティオス（『学説誌』I 23,7 [Dox.320]）

ヘラクレイトスは全世界から静止や停止を奪い去った。なぜならそういったものは死者にこそ属すべきものだからである。彼はすべてのものに運動をあてがう。永遠なるものには永遠の運動を、消滅するものには消滅的な運動を。

7

アリストテレス（『形而上学』Γ 3. 1005 b 23）

なぜなら何人であれ、同じものを「ありかつない」と想定するのは不可能だからである。たとえヘラクレイトスがそのようにいったと人々は考えているにしてもである。

8

アエティオス（『学説誌』I 7,22 [Dox.303]）

ヘラクレイトスは、循環する永遠の火を〔神とし〕、対立する運動から諸存在を造り出す創造者〔デミウルゴス〕たるロゴスを運命とする。

アエティオス（『学説誌』I 27,1 [Dox.322]）

ヘラクレイトスは、一切は運命にしたがっており、またその運命を必然であるとする。

アエティオス（『学説誌』I 28,1 [Dox.323]）

ヘラクレイトスは、運命の実体は万物を貫くロゴスであると主張した。それはエーテル的な物体であり、万物の生成の種子であり、規則正しい周期の尺度である¹。

1) ストア的色彩の強い報告となっている。

9

アリストテレス（『動物部分論』A 5. 645 a 17）

ちょうどヘラクレイトスが彼に会いたいと思ってやってきた客たちにいったといわれているように。すなわちその客たちは〔ヘラクレイトスの家に〕入ろうとしたが、炉の前で暖を取っている彼を見て立ち止まっていた。その彼らにヘラクレイトスは、「ためらわずに入ってきたまえ、ここにも神々は居たまうのだよ」と勧めたとのことであるが、そのようにわれわれはどのような動物の研究にもたじろがずに立ち向かわねばならない。なぜならどのようなものの内にもなにがしかの自然で美しいものはあるからである。

10

プラトン（『ソピステス』242 D）

他方イオニアのムーサたちや、少し後になるが、シケリアのムーサたちは¹、両者を結び合わせて、有るものは多であると共に一であり、憎しみと愛によって結合されているというのが最も安全であると考えた。なぜなら「それは常に争うことによって和合する」とムーサたちのより張り詰めた方のムーサはいうからである。他方より穏やかなムーサは、それらが常にそういったあり方をするという点を弛めて、万有は交互に、ある時はアプロディテによってひとつとなり、親しくなるが、ある時は一種の争いによって多となり、互いに敵対し合うという。

1) イオニアのムーサはヘラクレイトス、シケリアのムーサはエンペドクレスを指している。

アリストテレス（『天体論』A 10. 279 b 12）

ところで〔天が〕生成したというのは万人の認めるところであるが、ある人々は、生成はしたが、永遠であるとし、ある人々は、自然によって造られた他のものと同様、消滅するとする¹。また別の人は、アクラガスのエンペドクレスやエペソスのヘラクレイトスのように、ある時はこういった仕方、他の時は別の仕方というように、交互に生成・消滅し、そういったことがそのような仕方、永遠につづいて行くとする。

1) 前者はヘシオドスやプラトン、後者は原子論者のレウキッポスやデモクリトスのことが念頭に置かれているのであろう。

アリストテレス（『自然学』Γ 5. 205 a 3）

ヘラクレイトスのいうようにすべてのものがいつかは火になるといったことは〔ありえない〕。

シンプリキオス（『アリストテレス「天体論」注解』94,4 Heib.）

ヘラクレイトスもまた、世界はいつかは焼き尽くされるという。そしてまたある時再び世界は時の

一定の周期にしたがって火から形成されるが、それらにおいて「一定量だけ燃え、一定量だけ消えながら」と彼はいう。後代のところでは、ストア学徒がまたそういった考えであった。

アエティオス（『学説誌』II 1,2 [Dox.327]）

タレス、ピュタゴラス、エンペドクレス、エクパントス¹、パルメニデス、メリッソス、ヘラクレイトス、アナクサゴラス、プラトン、アリストテレス、ゼノンは、世界はひとつであるとする。

- 1) 前4世紀のピュタゴラス派の哲学者。シュラクゥサイの人。ピュタゴラス派の数哲学から出発して原子論のはしりのような思想を唱えた。

アエティオス（『学説誌』II 4,3 [Dox.331]）

ヘラクレイトスは、世界は時によって生じるのではなく、神慮に基づいて生じるとする。

アエティオス（『学説誌』II 11,4 [Dox.340]）

パルメニデス、ヘラクレイトス、ストラトン¹、ゼノンは、天は火から出来ているとする。

- 1) ランプサコス出身のペリパトス派の哲学者。テオプラストスの後を継いで第3代目のペリパトス派学頭となった（前287－269年在任）。自然学の分野の研究をよくし、「自然学者」と呼ばれた。

11

アエティオス（『学説誌』II 13,8 [Dox.342]）

パルメニデスとヘラクレイトスは、諸星は火の圧縮されたものであるとする。

アエティオス（『学説誌』II 17,4 [Dox.346]）

ヘラクレイトスとストア学徒たちは大地からの蒸発によって諸星は養われているとする。

12

アエティオス（『学説誌』II 20,16 [Dox.351]）

ヘラクレイトスとヘカタイオスは、太陽は海から立ち昇る知的な松明〔火〕であるとする。

アエティオス（『学説誌』II 22,2 [Dox.352]）

ヘラクレイトスは、〔太陽は〕ボール〔鉢〕のような形をし、凸状であるとする。

アエティオス（『学説誌』II 24,3 [Dox.354]）

ヘラクレイトスは、ボール〔鉢〕のような形をしたものが回転することによって〔蝕は生じる〕とする。回転の結果、窪みが上になり、凸面の方が下となって、われわれの眼の方に向くのである。

アエティオス（『学説誌』II 27,2 [Dox.358]）

ヘラクレイトスは、〔月は〕ボール〔鉢〕のような形をしているとする。

アエティオス（『学説誌』II 28,6 [Dox.359]）

ヘラクレイトスは、太陽と月は同じあり方をしているとする。なぜならそれら両天体とも形という点では〔共に〕ボール〔鉢〕のような形をしており、水分の蒸発から光を受け取って現われに応じて輝いているのだからである。ただ太陽の方が一層明るい、それは、太陽はより清らかな空気の中を運行しているのに対し、月は濁った空気の中を運行しているからである。それゆえに月はよりぼんやりとしか見えないのである。

アエティオス（『学説誌』II 29,3 [Dox.359]）

アルクマイオン¹、ヘラクレイトス、アンティポン²は、ボール〔鉢〕のような形をしたものの回転と傾斜によって〔月蝕は起こる〕とする。

- 1) クロトンのアルクマイオン。前500年頃活躍した自然哲学者、医者。ピュタゴラスの弟子。
「人間に係わることの多くは対をなしている」と主張し、白と黒、甘さと辛さ、善と悪、大と小などの対立を原理とした。
- 2) ソフィストのアンティポン。前5世紀末。アテナイの人。ソクラテスの対話相手のひとり。

13

アエティオス（『学説誌』II 32,3 [Dox.364]）

ヘラクレイトスは〔大年は〕10800太陽年より成るとする。

〔参照〕ケンソリヌス（『生誕の日について』18）

この年は、ある人々によっては太陽の年といわれ、他の人びと〔ヘラクレイトス?〕によっては $\theta \epsilon \omicron \upsilon \epsilon \nu \iota \alpha \upsilon \tau \omicron \varsigma$ 〔神の年〕といわれている。…これをアリストアルコス¹は2484年で一巡するとしており、ヘラクレイトスとリノス²は10800年で一巡するとする。

- 1) サモス出身の天文学者。前310－230年頃。太陽中心の地動説を唱えた。
- 2) オルペウスの師とされ、リズムと旋律の発明者といわれる。アポロンとムーサの子ともいわれる伝説的人物。

14

アエティオス（『学説誌』III 3,9 [Dox.369]）

ヘラクレイトスは、雷は風と雲の撚り合せと氣息〔空気〕の雲の中への吹き込みにより、稲妻は燦されたものの燃焼により、プレステール〔竜巻、旋風〕は雲の着火と鎮火によるとする。

14 a

ニカンドロス（『解毒剤』171ff.）

また汝〔風〕は苦き海をすみれ色に染め上げるであろう。
そして海は火と共に風に仕えるようにエノシガイオス〔ポセイドン〕がさせている。
なぜなら事実永遠に生きる火も憎むべき風の息吹に制圧され、
果てしなく広がる水も北西の風に打ち震えるから。
だから秩序なき猛烈なる風は
船を支配し、屈強なる男たちを滅ぼしてしまう。
また木材は定めによって憎まれし火にしたがう。

上掲箇所に対する逸名著作家の古注

ατμευελν は「仕える」、「したがう」の意味である。なぜなら ατμενες [仕える者] とは奴隷たちだからである。海と火が神の定めるところにしたがって風に仕えるというのは、もちろんヘラクレイトスとメネクラテス¹が語ったことである。αργεστας は風の一種。αχυνετον は「広大に広がった」の意味。すなわち α は強意の接頭語である。ところでこれらのことによってヘラクレイトスはまた、互いに反対であるものもすべて同一のもとにあるということを説明しようとしているのである。… δεσποζειν ηων: すなわち船は海にしたがい、木材は火にしたがうのである。εμφορεων δ' αλζηων: 「海で滅びた者たち」の意味。

- 1) 前4世紀後半のシュラクゥサイの医師のメネクラテスか。彼は自らをゼウスと称し、そのように振舞った。

15

アリストテレス (『デ・アニマ』A 2. 405 a 25)

またヘラクレイトスも、魂は蒸発物であり、それから他のものは出来ているといったとするなら、魂を原理としているのである。

マクロビウス (『スキピオの夢』14,19)

自然学者ヘラクレイトスは、〔魂は〕星の本質の火花であるとする。

アエティオス (『学説誌』IV 3,12 [Dox.389])

ヘラクレイトスは、世界の魂は世界内の水分からの蒸発物であり、動物の中の魂は外部の蒸発物と内部の蒸発物から成るとするが、いずれも同種であるとする。

16

セクストス・エンペイリコス (『諸学者論駁』VII 126 - 134)

(126) またヘラクレイトスは、彼もまた人間は真理の認識のために二つの器官、すなわち感覚と理性を具えていると考えるのであるが、そのうち感覚は、先に述べた自然学者たちと同様、信頼に値しないと見なし、理性を基準とした。次のような言い方でもって彼は感覚を反駁している。「野蛮な魂を持つ場合には、眼や耳は人間にとって悪しき証人。」これは、非理性的な感覚を信じるということが野蛮な魂たるゆえんであるということである。(127) そして理性が真理の審判者であると彼は主張するが、しかしどのような理性であつてもそうだというのではなく、「共通の神的な理性」がそうなのである。なぜならわれわれを取り巻くものは理性的で知的であるというのがこの自然学者〔ヘラクレイトス〕のお気に入りの言だからである。(128) ホメロスもまたはるか以前にこのような見解を唱えている〔『オデュッセイア』XVIII 136 - 7〕。曰く、

なぜなら人間どもと神々の御父君が日毎にお遣わしになる

そのような知性が地上の人間どものそれなのだから。

またアルキロコス¹も「ゼウスが日毎にお遣わしになる、そのことを人間どもは考えるに過ぎぬ」という。エウリピデスでも同じことがいわれている。

御身が何者であられるか見て取ることは極めて難しく、
ゼウスよ、自然の必然であれ、死すべき者どもの知性であれ、
御身に祈り奉る。

(129)ところでヘラクレイトスによれば、この神的な理性を呼吸によって吸い込むことによってわれわれは知的となるのである。そして睡眠中は忘却しているが、目覚めるとまた再び意識あるものとなる。というのは、睡眠中は感覚の通路が閉じられ、われわれの中の知性は周辺の取り巻くものとの接触から切り離され、ただ呼吸による根のような絡み付きだけが保たれているのだからである。そしてそのように切り離されると、それは以前に有していた記憶を失ってしまう。(130)だが目覚めると、それはまた再び窓から覗くように感覚の通路から覗き見、周辺を取り巻くものと合流して理性的な力を身に着けるのである。ところで炭は火に近づけられると変化をきたして灼熱するが、引き離されると消えてしまう。まさにそれと同じように、われわれの身体内に逗留する周辺を取り巻くものの部分も、切り離されるとほぼ非理性的となるが、多くの通路を通して接触すると宇宙全体と同種となるのである。(131)そこでこの「共通の神的なロゴス」が(それに与ることによってわれわれは理性的となるのであるが)真理の基準であるとヘラクレイトスは主張するのである。それゆえすべての人に共通に思われているものは、信ずるに値するのである。(なぜなら「共通の神的なロゴス」によって捉えられているのであるから。)他方、ただ若干の人だけにのみ思い付けられるに過ぎないものは、反対の理由によって、信じるに値しない。(132)いずれにせよ先に述べた人〔ヘラクレイトス〕は、その著『自然について』の冒頭で、周辺を取り巻くものを指し示して次のようにいっている。「ロゴスはこの通りのものとして常にあるのだけれども、人間どもはこれを理解しない。これを聞く前も、最初にこれを聞いた後も。なぜなら万物はこのロゴスにしたがって生じているのだが、彼らはそ知らぬ風だからだ。わたしが各々のものを自然にしたがって区分し、どのようなか示しつつ十分に物語ったそういった言葉も行為も経験した者たちにしてからがそう。また他の人間どもは、ちょうど眠っているときにどれだけのことをしたか忘れているように、目覚めていてもどれだけのことをしているか気づいていない。」(133)神的なロゴスに与ることによってわれわれはすべてのことをなし、また思惟するのだということを、彼はこれらの言葉ではっきりと心に留めさせているが、少し先のところでさらに次のように付け加えている。「それゆえ〈公的なもの、すなわち〉共通なものにしたがわねばならない。なぜなら共通なものは公的だからである。だがロゴスは公的であるが、多くの者は自分の思いしか持たぬかのように生きている。」これは万有の管理のあり方の説明以外のものではない。それゆえロゴスの記憶と共にある限り、われわれは真なのであり、私的である限り、偽なのである。(134)すなわちこの箇所やこういった言葉において、彼は極めてはっきりと共通のロゴス〔理性〕が基準であると主張し、共通に思われているものは共通のロゴスによって判定されたものであるがゆえに信じるに値するが、各人に私的に思われていることは偽であるといっているのである。

- 1) 前7世紀の中葉にかけて活躍した大抒情詩人。抒情詩の父と呼ばれる。パロスのひと。傭兵として各地を転戦した。嘲罵のイアンボス詩の完成者とされ、その舌鋒は鋭く、その矛先となった人を死にいたらしめたほどであった。

セクストス・エンペイリコス (『諸学者論駁』VIII 286)

なおまたかのヘラクレイトスは、人間は〔本来は〕理性的でなく、ただ周囲を取り巻くものだけが知的であるという。

テュアナのアポロニオス（『書簡集』18）

自然学者ヘラクレイトスは、人間は本性的には非理性的であるといった。

17

アエティオス（『学説誌』IV 7,2 [Dox.392]）

〈ヘラクレイトスは、魂は不滅であるとする。〉なぜなら〔身体から〕出ると、それは万有の魂へと、同族のものに向かって戻って行くからである。

18

アエティオス（『学説誌』V 23,1 [Dox.434]）

ヘラクレイトスとストア学徒は、人間は第二ヘブドマス〔14歳〕の頃から成熟し始め、その頃から精液が騒ぎだすという。

19

プルタルコス（『なぜピュティアの神託は衰微したか』11, 415 E）

「若盛りの」という読み方をしている人たちは、ヘラクレイトスにしたがって30年を一世代としている。これだけの時に生み出す者〔親〕は彼から生み出される者〔子供〕を提供し、また生み出された者〔子供〕も生み出す者〔親〕となる。

ピロン（『断片集』Harris [Cambr.1886] p.20）

人は30歳で祖父となることができる。14歳頃に成人に達し、その年齢で子供を儲ける。そして儲けられた子供がその歳になると再び15歳で自分と同じような子供を儲ける。

〔参照〕ケンソリヌス（『生誕の日について』17,2）

世代とは誕生と死によって区切られる人生の期間である。それゆえ30年を一世代と見なした人々は大いに誤っているように思われる。すなわちこの期間を「世代」呼んだ最初の人々はヘラクレイトスであるが、彼がそう見なしたのは、この期間内に「年齢の1サイクル」があるからである。しかし彼が「年齢の1サイクル」と呼ぶものは、自然が人間の種づけから種づけへと回帰する期間のことである。

リュディアのヨハネス（『暦月について』III 14）

それゆえヘラクレイトスが月を世代と呼ぶのは、的外れではないのである¹。

1) この証言はヘラクレイトスの「世代」の誤解に基づいている(ディールス)。

20

カルキディウス（『プラトン「ティマイオス」注解』C.251,p.284,10,Wrob.）

他方ヘラクレイトスは、ストア学徒も彼に同意するが、われわれの理性を世界の出来事を支配しコントロールしている神の理性と結びつける。この不断の交流のゆえにわれわれの理性は、魂が眠っている間も理性的に決定されたことを知っており、感覚の助けを借りて未来のことを予示するのである。

ここから見知らぬ場所のイメージが現れたり、生きている人や死んだ人の像が現われるといったことが起こるのであって、この同じ人〔ヘラクレイトス〕はまた、われわれの理性は予知能力を有しており、神の権能が教えるとき、その至当性に前もって気づくことができると主張する。

21

クレメンス（『雑録集』II 130）

なぜならクラゾメナイのアナクサゴラスは観想〔テオリア〕とそれから得られる自由が人生の目的であるといったとのことであるが、エペソスのヘラクレイトスは満足を人生の目的としたと彼らはいうからである。

22

アリストテレス（『エウデモス倫理学』H 1. 1235 a 25）

またヘラクレイトスは次のように歌った詩人を非難している。

神々からも人間からも、争いがなくなりますように。

なぜなら高い音と低い音がなければ調和はないし、雄と雌という対立するものがなければ動物は存在しないだろうからである。

シンプリキオス（『アリストテレス「カテゴリー論」注解』412,26）

〔ホメロスの詩句に付け加えて〕なぜならすべてのものは消え失せるであろうと〔ヘラクレイトスは〕いっているからである。

ヌウメニオス（断片16 Thedinga：カルキディウス『プラトン「ティマイオス」注解』C.297より）

人生の災いが消滅し滅び去ることを願ったホメロスを、「彼は世界が滅びることを喜んでいるのを理解していないのだ。なぜなら、そうすれば、質料（これが災いの源泉であるが）が駆逐されてしまうことになるだろうから」と非難したヘラクレイトスを、ヌウメニオス¹は称賛している。

1) 紀元2世紀の後半に活躍したシリアのアパメイア出身の新ピュタゴラス派の哲学者。

23

ポリュビオス（『歴史』IV 40）

知らないことについて詩人や神話作家を証人とするのはもはや適当でないであろう。ヘラクレイトスによれば、極めて多くの問題についてわれわれの先人たちは信ずるに値しない保証人を担ぎ出してきたのである。

B 著 者 断 片

ヘラクレイトス『自然について』

1

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』VII 132）

ロゴス〔理〕はこの通りのものとして常にあるのだけれども、人間どもはこれを理解しない。これを聞く前も、最初にこれを聞いた後も。なぜなら万物はロゴスにしたがって生じているのだが、彼らはそ知らぬ風だからだ。わたしが各々のものを自然にしたがって区分し、どのようなかを示しつつ十分に物語ったそういった言葉も行為も経験した者たちにしてからがそう。また他の人間どもは、ちょうど眠っているときにどれだけのことをしたか忘れてるように、目覚めていてもどれだけのことをしているか気づいていない。

2

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』VII 133）

それゆえ〈公的なもの、すなわち〉共通なものにしたがわねばならない。なぜなら共通なものは公的だからである。だがロゴスは公的であるが、多くの者は自分の思いしか持たぬかのように生きている。

3

アエティオス（『学説誌』II 21,4 [Dox.351,20]）

〔太陽の大きさについて〕人間の足の幅。

4

アルベルトゥス・マグヌス（『植物について』VI 401 p.545 Meyer）

もし幸福が肉体の喜びの内にあるとするなら、ヤハズエンドウを見つけて食べようとするとき牛は幸福であると、われわれはいわねばならないであろう。

5

アリストクリトス（『神智学』68）

彼らは別の血で汚すことによって身を清めている。それはまるで泥の中に足を踏み入れた者が泥で洗い落とそうとしているようなものだ。誰かがそんなことをしている彼に気づいたなら、彼は気が狂っていると思ったことであろう。また彼らはどのような神像にでも祈るが、それはお堂に向かって話しかけているようなもので、神々が何であり、英雄神が何であるか、少しも知っていないのだ。

6

アリストテレス（『気象学』B 2. 355 a 13）

もしそうなら、ヘラクレイトスのいうように「太陽は日々に新しい」だけでなく、常に新しい太陽が連続して生じていることになろうからである。

7

アリストテレス（『感覚と感覚されるものについて』5. 443 a 23）

存在するものすべてが煙となれば、鼻がそれを識別することになろう。

8

アリストテレス（『ニコマコス倫理学』Θ 2.1155 b 4）

ヘラクレイトスは「対立するものが和合する」のであり、また「相異なるものから最も美しい調和が生まれ」、「万物は争いによって生じる」という。

9

アリストテレス（『ニコマコス倫理学』K 5.1176 a 7）

なぜなら馬の快樂と犬のそれと人間のそれは異なるからである。ちょうどヘラクレイトスが「驢馬は黄金よりも、むしろ藁くずの方をよしとする」といっているように。驢馬にとっては黄金よりも食物の方がありがたいのである。

10

擬アリストテレス（『宇宙論』5. 396 b 7）

おそらく自然は反対のものを好み、それら反対のものから調和を作り出すのであって、同じようなものからではないのである。それは例えば、自然は雄を雌と掛け合わせ、そのそれぞれを同性のものと掛け合わせるようなことはせず、反対のものによって最初の和合を作り出し、同じものによって作り出しはしなかったごとくである。技術もまた自然を真似て、こういったことをしているように思われる。なぜなら絵画は白と黒、黄と赤を混ぜ合わせて原物に合致した似像を完成するし、また音楽は高い音と低い音、長い音と短い音を同時に混ぜ合わせて異なる音の内にひとつの調和を作り出し、文法は母音と子音から混合を作り出して、それらからなる全体的な技術を構成するからである。このことと暗い人へラクレイトスによって語られていることは同じことである。すなわち「全体と全体でないもの、和合するものと和合しないもの、共鳴するものと共鳴しないものは繋がっている。万物から一が生じ、一から万物が生じる。」

11

擬アリストテレス（『宇宙論』6. 401 a 8）

動物のあるものは野性であり、あるものは飼育されているが、またあるものは空中に養われ、あるものは地上に養われ、あるものは水中に養われるが、それらは神の掟にしたがって、生まれ、盛りを迎え、そして死んで行くのである。なぜならヘラクレイトスのいうごとく、「（地を）這うものはすべて、〔神に〕鞭うたれつつ、放牧されている」のであるから。

12

アレイオス・ディデュモス（エウセビオス『福音の準備』XV 20 [Dox.471,1] による）

ゼノン¹は、魂は感覚能力を有する蒸発物であるという。それはまさにヘラクレイトスが、魂は知的な蒸発物として絶えず生じてくるということを示さんとして、それを川になぞらえ、次のようにいっているのと同様である。「川は同じでも、その中に入っていく者には次から次へと異なる水が流れてくる。魂もまた水分から蒸発してくる。」

1) ストアのゼノン。

13

アテナイオス（『食卓の賢人たち』V 178 F）

なぜなら優美な者は不潔であってはならないし、むさくるしくあってもならず、またヘラクレイトスのいうごとく、「泥を好む」ようであってもしなければならないからである。

クレメンス（『雑録集』Ⅰ 2）

豚は清水より、泥を好む。

14

クレメンス（『プロトレプティコス』22）

ところで誰に対してエペソスのヘラクレイトスは予言しているのか。「夜まいる者、呪術を行なう者、バッコスの信徒、レーナ祭で狂乱する者、密儀の徒ども」にである。これらの者たちに彼は死後の業罰を警告するのであり、彼らに劫火を予言するのである。「なぜなら人々の間で通常行なわれている密儀というものは、実に汚らわしいものだからだ。」

15

クレメンス（『プロトレプティコス』34）

行列を作ったり、性器の歌を歌ったりするのがもしディオニュソスのためでなかったなら、彼らは実に恥ずかしいことをしたことになる。だが彼らが狂乱し、バッコスの祭りを捧げているディオニュソスは、ハデス¹と同じなのだ。

1）冥界の王。また冥界、すなわち死者の国そのものも意味し、ここではディオニュソスの狂乱が死に通じることを示唆している。

16

クレメンス（『教育者』Ⅱ 99）

なぜなら、感覚的な光であれば人はおそらく身を隠すこともできようが、知的な光から身を隠すことは不可能だからである。「決して没することのないものから、どうして人は身を隠すことができようか」と、ヘラクレイトスのいっているごとくである。

17

クレメンス（『雑録集』Ⅱ 8）

なぜなら多くの者どもはそういったことに会ってはいても、それを悟らないからだ。また彼らは教えられても認識せず、自分だけの思いに耽っている。

18

クレメンス（『雑録集』Ⅱ 17）

期待しなければ、望外のものを見出すこともないであろう。それは〔その時には〕探求されないもの、道の通じないものにとどまるから。

19

クレメンス（『雑録集』Ⅱ 24）

ある人々の信用のなさを非難してヘラクレイトスはいっている。「聞く術も語る術も知らぬ輩ども。」

20

クレメンス（『雑録集』Ⅲ 14）

次のようにいうとき、少なくともヘラクレイトスは出生を呪咀しているように思われる。「〔ひとたび〕生まれると、彼らは生きようとするが、それは悲運を身に引き受けようとして、むしろ死ぬことを欲することなのだ。そして子供を残すが、それは〔新たな〕悲運を生み出すことなのだ。」

21

クレメンス（『雑録集』III 21）

ヘラクレイトスですら出生を死とは呼んでいない。…彼は次のようにいう。「目覚めてわれわれが見ている限りのものは死であり、眠って見ているものは眠りである。¹⁾

- 1) B 2 6 の同じクレメンスの証言内容からして、正しい引用は「目覚めてわれわれが見ている限りのものは眠りであり、眠って見ているものは死である」ではないかと思われる。

22

クレメンス（『雑録集』IV 4）

なぜなら、金を探す者たちは多量の土を掘り、わずかな金を見つけるに過ぎないからだ。

23

クレメンス（『雑録集』IV 10）

もしそれらのことがなかったなら、彼らはディケー〔正義〕の名を知ることがなかったであろう。

24

クレメンス（『雑録集』IV 16）

戦死者は、神々も人間もこれを敬う。

25

クレメンス（『雑録集』IV 50）

より偉大なる死はより大きな分け前を受け取るからである。

26

クレメンス（『雑録集』IV 143）

人間は夜になると光をつける。眼の光が消えるからである。生者も眠っているとき死者に接し、目覚めているとき眠れる者に接する。

27

クレメンス（『雑録集』IV 146）

死んだ人間を待っているものは、彼らが予想もしなければ考えもしないものである。

28

クレメンス（『雑録集』V 9）

なぜなら評判の最も高い者といっても、世間の通説を知り、それを守っているに過ぎないからだ。だがしかし嘘のこしらえ事をでっち上げたり、嘘の証言をする者どもをディケー〔正義の女神〕は赦したまわぬであろう。

29

クレメンス（『雑録集』V 60）

なぜなら、最上の人はずべてを捨ててもひとつのものを選び取るからである。永続的な栄誉を取り、可滅的ものを捨てる。だが多くの者は家畜のごとくたらふく食って、満足しきっている。

30

クレメンス（『雑録集』V 105）

この世界はずべてに同じであり、神々にせよ人間にせよ、誰かが造ったというようなものではない。むしろ一定量だけ燃え、一定量だけ消えながら、永遠に生きる火として常にあったし、〔今も〕あり、〔将来も〕あるであろう。

31

クレメンス（『雑録集』V 105）

生成も消滅もあると彼が考えていたことは、次の付言が明らかにしている。「火の転換はまず海である。海の半分は大地となり、半分はプレステール〔竜巻〕となる。」なぜならこのことは、火が一切を管理するロゴスと神によって空気を経て世界秩序の種子たる水分に変えられることを可能的に語っているからである。そしてこの水分を彼は「海」と呼ぶのであり、それからさらに大地と天と周辺を取り巻くものが生成するのである。そしてそれらがどのようにしてまた再び元に還元され、火化されるのか、次の言葉によって彼は明確に示している。「大地は溶けて海となるが、測れば大地になる前にあったのと同じ割合になる。」

32

クレメンス（『雑録集』V 116）

知るものはただひとつであり、ゼウスの名で呼ばれることを欲しもしなければ、欲しもする。

33

クレメンス（『雑録集』V 116）

一人の意にしたがうのも、法である。

34

クレメンス（『雑録集』V 116）

聞いても理解しない連中はつんぼのようなものだ。居ても居ないという言葉は彼らのことをいっているのだ。

35

クレメンス（『雑録集』V 141）

ヘラクレイトスによれば、「知を愛し求める者は実に多くのことを探究しなければならない」からである。

36

クレメンス（『雑録集』VI 16）

魂にとり水となることは死であり、水にとり土となることは死である。だが土から水が生じ、水から魂が生じる。

37

コルメラ（『農耕について』VIII 4）

「豚は汚物に浴し、鶏は砂塵や灰に浴す」というエペソスのヘラクレイトスをもし信じるならば、云々。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』I 23）

ある人たちによれば、彼〔タレス〕は天文学を研究した最初の人であったように思われる。…ヘラクレイトスもデモクリトスもそのことを証言している。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』I 88）

プリエネにはテウタメノスの子ピアス¹がいたが、彼は他の者よりずっと語るに足る人物だ。

1) 七賢人のひとり。「大多数の人間は悪党である」というのが彼の言葉。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 1）

博識は分別を教えない。なぜならもし教えるのであれば、ヘシオドスにもピュタゴラスにも、クセノパネスにもヘカタイオスにも教えたはずだから。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 1）

なぜなら知はただひとつだからである。すなわちすべてのものを通して万物を操っている神慮を認識すること。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 1）

ホメロスは競技場から放り出され、鞭打たれるべき輩だ。アルキロコスも同じ。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 2）

傲慢を消すことは火事を消す以上に急務である。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 2）

市民は城壁を守るように、法を守るために戦わねばならない。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 7）

どこまで行こうと、またどの道を辿ろうと、君は魂の限界を見出だすことはないであろう。それほどにも深いロゴス〔理〕をそれは有するのだ。

46

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 7）

「自惚れは気違い」であり、視覚は偽であると彼は語っていた。

47

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』IX 73）

最も大切なことについてよいかげんに推測するようなことはしないでおこう。

48

『語源辞典』（『語源辞典（Etymologicum genuinum）』当該項）

生〔ビオス〕：ところで弓にはビオス〔生〕という名があるが、その働きは死である¹。

- 1) βίος は「生」、βίον は「弓」を意味する。したがって同じ「ビオス」であっても、アクセントの位置によって「生」の意味にも「弓」の意味にもなるわけである。

49

ガレノス（『家禽の見分け方について』VIII 773 K.）

ひとりでも、最上の人であれば、わたしには万人にも値する。

49 a

文法家のヘラクレイトス（『ホメロスの比喩』24）

同じ川にわれわれは入って行くのでもあれば、入って行かないのでもある。われわれは存在するのでもあれば、存在しないのでもある。

50

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 9）

ところでヘラクレイトスは、万有は分割しうるのでもあれば不可分でもあり、生成するのでもあれば不生でもあり、死すべきもののでもあれば不死でもあり、永遠のロゴスでもあり、父でもあれば息子でもあり、正義なる神でもあるという。「わたしに聞くのではなく、ロゴスに聞きて、万物がひとつであることを認めるのが知というものだ」と彼は語っている。

51

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 9）

これを誰も知らず、また認めてもないことを非難して、彼〔ヘラクレイトス〕は次のような具合にいつている。「行き違うものがどうしてそれ自身において和合するのか、彼らは理解しない。ちょうど弓とリュラのように、逆に引き合う調和というものもあるのだ。」

52

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 9）

人生は遊ぶ子供、将棋する子供である。王権は子供の手中にある。

53

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 9）

戦いは万物の父であり、万物の王である。それはある者を神とし、ある者を人間とした。またある者を奴隷とし、ある者を自由人とした。

54

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 9）

現れた調和より、現れていない調和の方が優れている。

55

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 9）

見たり聞いたり学んだりできるもの、そういったものをわたしはまず尊重する。

56

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 9）

人間は現れているものを認識するのにホメロスと同じような仕方で騙されていると彼〔ヘラクレイトス〕はいう。そのホメロスはギリシア人の誰よりも賢明であったのだ。なぜなら子供たちは虱を潰しながら次のようにいつて、かの人〔ホメロス〕を騙したからである。「見つけて捕えたのは置いて行くが、見つからずに捕えなかったのは持って行く」と。

57

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 10）

大多数の者の先生はヘシオドスである。彼が一番多く知っているとは彼らは信じているのだ。だがその彼は昼と夜が何であるかも認識していなかった。すなわちそれらはひとつなのである。

58

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 10）

善と悪は（同じである）。そこでヘラクレイトスはいう。「医者とは切ったり、焼いたり」、ありとあらゆる仕方で病人を苦しめておいて「報酬を要求するが、そういったことをすることでは」病人から「〔報酬を〕取り立てる筋合いなど少しもありはしないのだ」。善と病気（も同じ）。

59

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 10）

「梳毛器の道筋はまっすぐでもあり、曲がってもいながら、ひとつの同じものである」と彼はいう。

60

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 10）

上り道と下り道はひとつの同じもの。

61

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 10）

海の水は最高に清くもあれば、最高に汚くもある。それは魚にとっては飲むことができ、安全であるが、人間にとっては飲むことができず、破壊的である。

62

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 10）

死なぬものは死ぬものであり、死ぬものは死なぬものである。彼らはかのものの死を生き、かのものの生を死ぬ。

63

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 10）

その中にわれわれが生まれたこの目に見える肉体の復活も彼〔ヘラクレイトス〕は語っており、この復活を生み出すものが神であることも知っていて、彼は次のようにいっている。「そこにいる者の前に彼らは立ち上がり、生者と死者を熱心に見張る番人となる¹。」また彼は次のようにいって、世界と世界におけるすべてのものの審判が火によって行なわれることを語っている。

1) 密儀のイメージのもとに冥界における死者のあり様を語ったものであろう。

64

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 10）

「雷光が万物を操る。」すなわち雷光が罰するのであるが、雷光ということで彼は永遠の火のことをいっているのである。またこの火は知性を具えており、全宇宙の管理を司ると彼はいう。

65

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 10）

その火を指して、彼はそれを「欠乏と満腹」と呼ぶ。欠乏が彼によれば世界形成であり、満腹が世界の火化〔世界大火〕である。

66

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 10）

「なぜなら火がやって来て、すべてのものを裁き罰するであろうから」と彼はいう。

67

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』IX 10）

神は昼と夜、冬と夏、戦争と平和、満腹と飢餓である。それが姿を変えるのは、ちょうど〈火が〉香と混ぜ合わされると、それぞれの香りに応じて〔さまざまに〕呼ばれるのと同様である。

67 a

注釈家のヒスドスス（カルキデいうス『プラトン「ティマイオス」注解』（34 B）への注）

このように生命の熱は太陽から発出して、生きとし生けるすべてのものに生命を供給しているのである。この見解にヘラクレイトスは満足して、蜘蛛を魂になぞらえ、蜘蛛の巣を身体になぞらえる極めて優れた比喻を語っている。「蜘蛛は巣の中央にとどまっていながら、蠅がその糸のどれかを破ったりするとただちにそこへ急いで駆けつけるが、それはまるで糸が切れるのに苦痛を感じるかのようなのである。ちょうどそれと同じように人間の魂も、身体のどこか一部が傷つけられると、そこへ急行するが、それはまるで、それがしっかりと〔そのあらゆるところに〕同じ割合で結びつけられている身体の損傷に耐えられぬかのようなのだ。」

68

イアンブリコス（『密儀について』I 11）

それゆえにまたヘラクレイトスはそれら〔密儀における儀式〕を、恐ろしい病を癒し、誕生のときに背負った禍から魂を解放するものとして、「治療」と呼んだのだが、もっともなことである。

69

イアンブリコス（『密儀について』V 15）

ところで供儀には二種類のものがあるとわたしは考える。一方は完全に清められた人間のそれであって、ヘラクレイトスのいうごとく、時たまひとりか、あるいは数えるばかりのわずかな人の身に起こるものであり、他方は物質的なもので、…。

70

イアンブリコス（『魂について』：ストバイオス『倫理学抜粋集』II 1,16 による）

そこで、どれほどすぐれているにせよ、人間の考えは「児戯」に過ぎぬとヘラクレイトスは見なしていた。

71

マルクス・アウレリウス（『自省録』IV 46）

また「道がどこへ通じているのかを忘れた男」のことも忘れないこと。

72

マルクス・アウレリウス（『自省録』IV 46）

彼らは、彼らが絶えず交わっているもの、すなわち全宇宙を管理しているロゴスと不仲であり、日々出会っているものが彼らには疎遠に思われるのだ。

73

マルクス・アウレリウス（『自省録』IV 46）

「眠れる者のごとく行なったり、いったりしてはならない。」というのは、そのような時〔眠る時〕にもわれわれは行なったり、いったりしていると思われるからである。

74

マルクス・アウレリウス（『自省録』IV 46）

「両親の子供（であるだけ）ではいけない。」これはすなわち、平たくいえば、受け継いだ〔だけではいけない〕とのこと。

75

マルクス・アウレリウス（『自省録』VI 42）

思うにかのヘラクレイトスも、「眠っている者も働いており、宇宙内の出来事の協働者である」と語っている。

76

テュロスのマクシモス（『哲学談議』XLI 4 p.489）

火は土の死を生き、空気は火の死を生き、水は空気の死を生き、土は水の死を生きる。

プルタルコス（『デルポイのEについて』18 p.392 C）

火の死は空気にとって誕生であり、空気の死は水にとって誕生である。

マルクス・アウレリウス（『自省録』IV 46）

「土の死は水が生まれることであり、水の死は空気が生まれることであり、空気の死は火が生まれることであり、その逆でもある」ということを。

77

ヌウメニオス（断片35 Thedinga：ポルピュリオス『ニンフたちの洞窟』10 による）

それゆえにヘラクレイトスもまた、「湿ったものとなることは魂にとり喜び、ないしは死である」というのである。生成へと生まれ落ちることはそれらにとり喜びである。だが彼は他のところで「われわれはかのものの死を生き、かのものはわれわれの死を生きる」といっている。

78

オリゲネス（『ケルソス論駁』VI 12）

なぜなら真の認識は人間習性の有するところではなく、神的習性の有するところだからである。

79

オリゲネス（『ケルソス論駁』VI 12）

大人も神にとっては幼稚な子供である。子供が大人にとってちょうどそうであるように。

80

オリゲネス（『ケルソス論駁』VI 42）

知らねばならぬ、戦いは共通であり、争いは正義であることを。そしてすべては争いと必然によって生じるのだということを。

81

ピロデモス（『弁論術』I c.57 および 62）

弁論家たちの教導はすべての理論をその目標とするところへ関係づけるものであって、ヘラクレイトスによれば「嘘つきの元祖」。

逸名著作家の古注（エウリピデス『ヘカベ』131 への注解）

他の人々は嘘をつくことを言葉の技術と語っており、ティマイオス¹も次のように書いている。
「したがってピュタゴラスが真の嘘つきの発明者であるとも、ヘラクレイトスによって非難されているような人だとも思われないのであって、むしろヘラクレイトス自身がペテン師であるように思われる。」

- 1) シケリアのタウロメニオン〔タオルミーナ〕出身の歴史家。前356－260年。タウロメニオンの支配者であったが、失脚後アテナイで弁論術や哲学を学び、『シケリア史』38巻を書いた。

82

プラトン（『ヒippias（大）』289 A）

猿の中で最も美しいものも、人間種族に比べれば醜い。

83

プラトン（『ヒippias（大）』289 B）

人間の中で最も賢明な者も、神に比べれば猿のごとくに見えるであろう。知恵の点においても、美しさの点においても、その他すべての点においても。

84 a

プロティノス（『エンネアデス』IV 8,1）

変化しつつ休息する。

84 b

プロティノス（『エンネアデス』IV 8,1）

同じものに耐え、同じものに支配されるのは疲れる。

85

プルタルコス（『コリオラヌス伝』22）

欲情と戦うのは困難である。なぜならそれは欲する者を魂〔命〕をかけて購うから。

86

プルタルコス（『コリオラヌス伝』38）

しかし神々の業の多くは、ヘラクレイトスによれば、「信じないことによって認識されることを逃れている」のである。

87

プルタルコス（『人の話を傾聴することについて』7 p.41 A）

愚かな人間はどのような話にも興奮しがちである。

88

擬プルタルコス（『アポロニオス宛の弔意書簡』10 p.106 E）

生きていても死んでいても、目覚めていても眠っていても、若くあっても年老いていても、そこにあるものは同じである。なぜならこのものが転化してかのものとなり、かのものが転化してこのものとなるのだから。

89

プルタルコス（『迷信について』3 p.166 C）

「目覚めている者にはひとつの共通の世界がある」が、眠ると各人は背を向けて「自分だけの」世界に戻って行くとヘラクレイトスはいふ。

90

プルタルコス（『デルポイのEについて』8 p.388 E）

万物は火の交換物であり、火は万物の交換物である。それはちょうど品物が黄金の交換物であり、黄金が品物の交換物であるのと同様である。

91

プルタルコス（『デルポイのEについて』18 p.392 B）

なぜならヘラクレイトスによれば「同じ川に二度入ることはできない」からであり、その〈同一の〉性状に関して可滅的実体のいかなるものにも二度触れることはできないであろうからである。転化の激しさと速やかさによって「それは散らし、また集め」（むしろ「また」でも「後に」でもなく、同時に集まり離れ去るのである）、「やってきては、去って行く」。

92

プルタルコス（『ピュティアは今日では詩の形で神託を降さないことについて』6 p.397 A）

サッポー調の歌がどれほど優美であり、魅惑的で聴く者を魅了するか、君は見ないのか。だが「シビュラ¹は」、ヘラクレイトスによれば、「狂った口調で、笑いもなければ飾り気もなく、魅惑的でもない言葉を発し」、その言葉でよく1000年の彼方に達するが、「それは神によって語っているからなのだ。」

1) アポロンの巫女。神懸りになって神託を降した。

93

プルタルコス（『ピュティアは今日では詩の形で神託を降さないことについて』21 p.404 D）

デルポイの神託所の主なる神〔アポロン〕は、語ることも隠すこともせず、印を示す。

94

プルタルコス（『亡命について』11 p.604 A）

なぜなら太陽といえども則を踏み越えることはなかろうからである。さもなければ、ディケー〔正義の女神〕の助力者たるエリニウス〔復讐の女神〕の見出だすところとなろう。

プルタルコス（『食卓歓談集』III pr.1 p.644 F)

「なぜなら無知は隠す方がよいからである。」だがそれも気がゆるんでいる場合とか、酒の席では、一苦勞である。

ストバイオス（『精華集』I 175)

「無知は」公衆の面前に曝すより、「隠した方がよい」。

プルタルコス（『食卓歓談集』IV 4,3 p.669 A)

なぜなら屍体は糞尿より捨てられるべきものだからだ。

プルタルコス（『老人は政治に参加するべきか』7 p.787 C)

なぜなら犬は見知らぬ者に吠えかかるからである。

プルタルコス（『月面に見える顔について』28 p.943 E)

魂はハデスでは嗅ぎ分けるだけとなる。

プルタルコス（『火と水ではどちらがより有益か』7 p.957 A)

太陽がなかったなら、他の星があったところで、夜であったろう。

プルタルコス（『プラトン哲学の諸問題』8,4 p.1007 D)

そして太陽がそれらの周期の監督者であり監視者であって、それらを定め、審判し、公示し、諸々の変化や、ヘラクレイトスのいう「すべてをもたらす季節」を出現させるのであるから、云々。

プルタルコス（『コロテス論駁』20.1118 C)

わたしはわたし自身を探究した。

ポリュビオス（『歴史』XII 27)

なぜならわれわれには二つの器官がいわば本性的に存しているのであって、それらによってわれわれはすべてのことを見聞きし、多くのことに携わるのだからである。すなわち聴覚と視覚がそれであるが、そのうち視覚の方が、ヘラクレイトスによれば、少なからず誠実である。というのは、「眼は

耳より正確な証人」だからである。

102

ポルピュリオス（『ホメロス「イリアス」についての諸問題』IV 4 への注）

神にとってはすべてが美であり、善であり、正義であるが、人間どもはそのあるものを不正と考え、あるものを正義と考える。

103

ポルピュリオス（『ホメロス「イリアス」についての諸問題』XIV 200 への注）

なぜなら円周上では始めと終わりは共通だからである。

104

プロクロス（『プラトン「アルキビアデス I」注解』p.525,21）

彼らの知性あるいは思慮は一体何なのだ。街の歌うたいどもを信じ、民衆を師としているが、「大多数は悪党であり、優れた者は少数である¹」ことを彼らは知らないのだ。

1）七賢人の一人、プリエネのビアスの言葉でもある。

105

逸名著作家の古注（ホメロス『イリアス』XVIII 251 への古注）

この箇所〔『イリアス』第18巻、251〕からヘラクレイトスは「ホメロスは天文学者であった」といっているものであり、またわたしの思うに、「人の世の何人も運命を逃れおおせた者はいない、云々」といわれている箇所〔『イリアス』第6巻、488〕でも、そうである。

106

プルタルコス（『カミルス伝』19）

凶日については、ある日をそういう日とすべきか、あるいはヘラクレイトスがある日をよき日とし、ある日を悪しき日とするヘシオドスを非難して、「すべての日の本性が同一であることを彼は知っていない」といったのが正しいかは、別のところで十分に検討しておいた。

セネカ（『書簡集』12,7）

一日はどの日も同じである。

107

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』VII 126）

野蛮な魂を持つ場合には、眼や耳は人間にとって悪しき証人。

108

ストバイオス（『精華集』III 1,174）

わたしがそのいうところを聞いた限りでは、知がすべてからかけ離れたものであることを認識するにいたった者は誰一人いなかった。

109

ストバイ奥斯（『精華集』I 175）

「無知は」公衆の面前に曝すより、「隠した方がよい」。

110

ストバイ奥斯（『精華集』III 1,176）

人間にとり、何でも望み通りになるというのはよくない。

111

ストバイ奥斯（『精華集』III 1,177）

病気は健康を、飢餓は満腹を、疲労は休息を心地よいもの、ありがたいものにする。

112

ストバイ奥斯（『精華集』III 1,178）

健全な思慮を持つことが最大の徳である。そして知恵とは〔自然に〕耳を傾け、自然に即して真実を語り行なうことである。

113

ストバイ奥斯（『精華集』III 1,179）

思慮はすべての者にとって共通である。

114

ストバイ奥斯（『精華集』III 1,179）

理性でもって語らんとする者は万有に共通するものを礎としなければならない。ちょうど国家が法を礎とするように。否、さらに一層強固な仕方ですしなければならない。なぜなら人間の法はすべて神の一なる法によって養われているのだからである。すなわち神のそれはどこまでも欲する限り支配し、すべてのものを充たしてなお余りあるものなのである。

115

ストバイ奥斯（『精華集』III 1,180a）

魂には己を増大させていくロゴスがそなわる。

116

ストバイ奥斯（『精華集』III 5,6）

自己を認識すること、健全な思慮を持つことは、万人に許されている。

117

ストバイ奥斯（『精華集』III 5,7）

大人も酒に酔えば年端もゆかぬ子供に導かれねばならないことになる。よろめきながら、どちらへ行くのかも分からずに。魂を湿らせたのだ。

118

ストバイオス（『精華集』III 5,8）

乾いた輝き、この上なく賢明で、最も優れた魂。〔あるいはむしろ〕乾いた魂はこの上なく賢明で、最も優れている。

119

ストバイオス（『精華集』IV 40,23）

エートスはその人にとりダイモーン〔運命〕である〔とヘラクレイトスはいった〕。

120

ストラボン（『地理書』I 6,p.3）

ヘラクレイトスも同じように「北極」という代わりに「熊星」という表現を用いているが、彼は一層優れており、また一層ホメロス的である。「東と西の境をなすのは熊星であり、そしてその熊星の反対側に澄んだゼウスの境目がある。」というのは、星の沈むところと昇るところの境目をなすのは熊星であって、北極ではないからである。

121

ストラボン（『地理書』XIV 25,p.642）

エペソスの連中は、成年に達した者はすべて首を縊って死ねばよいのだ。そしてポリスはこれを未成年の者に委ねたらよいのだ。彼らはヘルモドロスという自分たちの中で最も有為な人物を、われわれのもとには最も有為な人物などいなくてよい。そんな者がいるなら、他のところで他の人たちと一緒に暮らしたらよいのだといって、追放したのだから。

122

『スーダ』（ $\alpha\gamma\chi\iota\beta\alpha\tau\epsilon\iota\nu$ 「近づく」、 $\alpha\mu\phi\iota\sigma\beta\alpha\tau\epsilon\iota\nu$ 「対立する」の項）

ヘラクレイトスの用語： $\alpha\gamma\chi\iota\beta\alpha\sigma\iota\eta$ （アンキバシエー〔緊迫〕）。

123

テミスティオス（『弁論集』5 p.69）

ヘラクレイトスによれば、「自然は隠れることを好む」。

124

テオプラストス（『形而上学』15 p.7 a 10）

天界全体とその諸部分の各々はすべて、形の点でも、能力の点でも、周期の点でも、秩序とロゴスの内にあるのに、諸原理にはそういったものは何もなく、「屑山のようにでたらめに積み重ねられたものからかくも美しい世界秩序が」とヘラクレイトスのいうごとくであるなら、それもまた不思議といわねばならない。

125

テオプラストス（『眩暈について』9）

混合酒も、掻き回されていないと分離してしまう。

125 a

ツェツェス（アリストパネス『福の神』88 への注）

彼〔アリストパネス〕は福の神を盲目に仕立てているが、それは徳がその〔富の〕一半の原因であるよりは、むしろ悪徳が原因だからである。それゆえエペソスの人ヘラクレイトスもまたエペソス人に対して次のように祈っているが、別に呪いをかけているわけではない。彼はいう、「エペソスの諸君、富が君たちを見捨てることのないように。その結果、君たちがやくざな人間だということを証明してしまうことのないように。」

126

ツェツェス（『「イリアス」解説』への古注 p.126 Herm.）

冷たいものが温められ、温かいものが冷やされる。湿ったものが乾かされ、乾いたものが湿らされる。

疑問断片・誤伝断片・偽作断片

126 a

アナトリオス（『10 という数について』p.36 Heiberg）

季節の理〔ロゴス〕にしたがって7が不死なる記憶の印たる二つのもの、月と熊星に現われ出るが、月には集合的に、熊星には分散的に現われる。

126 b

逸名著作家の古注（『プラトン「テアイテトス」注解』71,12 : 152 E への古注）

成長に関する理論に関して、ピュタゴラス学徒の仲間であったエピカルモス¹はそれとは別のある巧妙な考えを思いついたが、彼はそれを、ヘラクレイトスの「不足がどの方面にあるかに応じて、常に各々のものはそれぞれ違ったように成長する」という考えに基づいて推理しているのである。ところで何もかも流転し、形を変えるのを止めないとするならば、実体は連続的な流れのもとにあって、別の時には別のものになることになる。

- 1) 前6世紀から5世紀にかけて主にシケリアで活躍した喜劇作家。シュラクサイの人だともコスの人だともいわれる。後代の著述家たちによってこのようにしばしばピュタゴラス派と結びつけられるが、彼がピュタゴラス派に属したかどうかは不明。

127

アリストクリトス（『神智学』69）

エジプト人たちに向かって彼はいった。「もしそれらが神であるなら、何のために君たちはそれらのことを悼むのか。もしそれらのことを君たちが悼むのであれば、もはや君たちはそれらを神と見なしてはいないのだ¹。」

- 1) これは一般にはクセノパネスのいったこととされている。クセノパネスの章A 13参照。

アリストクリトス（『神智学』74）

ダイモーンに礼拝しているギリシア人たちを見て、ヘラクレイトスはいった。「ダイモーンの聞いてもない像に、聞いているかのように彼らは祈っている。報いもしない像に、そのことを〔それが〕求めているかのように祈っている。」

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』VIII 6）

ムネサルコスの子ピュタゴラスは誰にもまして研究に励んだ。そしてこれらの著作を選び出して自分の知恵としたが、博識、まやかしに過ぎぬ。

〔金言集〕（Gnomologium Monacense Latinum, I 19, Wölfflin p.18）

人を笑わせるのもよいが、自分が笑うべきものに見られるようであってはならない。

〔金言集〕（Gnomologium Parisinum, ed. Sternbach n.209）

自惚れは上達の妨げ。

〔金言集〕（Gnomologium Vaticanum, 743, ed. Sternbach n.312）

名誉は、神々も人間も奴隷にする。

〔金言集〕（Gnomologium Vaticanum, 743, ed. Sternbach n.313）

悪しき者どもが誠実な人の訴訟相手。

〔金言集〕（Gnomologium Vaticanum, 743, ed. Sternbach n.314）

教養は、教養ある者にとってもうひとつの太陽。

〔金言集〕（Gnomologium Vaticanum, 743, ed. Sternbach n.315）

よく思われるには、よくなることが一番の近道。

逸名著作家の古注（エピクテトスへの古注 p.LXXI Schenkl）

ヘラクレイトスの言葉：戦いに斃れた者の魂の方が、病気に斃れた者のそれより清い。

137

ストバイオス（『自然学抜粋集』I 5,15 p.78,11）

少なくとも彼〔ヘラクレイトス〕は、「なぜなら万事にわたって運命による定めがあるからである」と書いている。

138

逸名の著作家（パリ写本 1630 p.XIV f.191 r）

人生に対する哲学者ヘラクレイトスの言葉：「どんな風に人生の道を歩んで行けばよいのだ¹。」

- 1) ヘラクレイトスではなく、エピグラム詩人ポセイディッポスの言葉＝ Poseidippos Epigr.2
1.

139

逸名の著作家（『ギリシア天文学一覧』IV 32, VII 106）

哲学者ヘラクレイトスの言葉：「ある人は、諸星は原理の内に置かれるというので、…」ただしその説を立てた人が主張している限りにおいて。

C 倣 作

1

ヒッポクラテス（『食餌法について』I 5 - 24 [VI 476ff. Littré）

(5)万物は、神的なものも人間に属するものも、上と下へ代わるがわる場所を取り替える。昼と夜は〔代わるがわる〕最大点と最小点にいたる。月が火の侵入と水の侵入によって最大点と最小点にいたるように、太陽は最長点と最短点にいたる。すべては同じであり、かつ同じでない。光がこの世にあれば、闇があゝの世にあり、光があゝの世にあれば、闇がこの世にある。かのものがこちらにくれば、このものがあちらに行き、あらゆる時、あらゆる場所を通じて、かのものがこのものの仕事をし、またこのものがかのものの仕事をする。また為すところを人々は知らず、為さざるところを知っていると思つてゐる。また見てゐるものも彼らは認識していないが、それにもかかわらず、すべては望むと望まざるにかかわらず、神的な必然性によって彼らの身に起こるのである。かのものがこちらにやつてきたり、このものがあちらにやつて行つたりして、互いに混じり合い、それぞれ大きくなつたり小さくなつたりして、定められた運命を成就する。すべてのものにとって消滅は相互的である。大きいものにとっては小さいものから、小さいものにとっては大きいものからであり、また成長も、大きいものにとっては小さいものからであり、小さいものにとっては大きいものからである。

(6)他のすべては、人間の魂も身体も、魂が秩序づけている。火と水の混合を持って、部分の部分、全体の全体が人間の中に入ってくるが、その一方は取り去り、他方は与える。一方の取り去るものは減少させ、他方の与えるものは増大させる。人が木を鋸で挽くとき、一方は引き、他方は押すが、それと同じことをそれは行なつてゐるのであつて、減少させつつ増大させるのである。人間の本性はか

くのごとくであって、一方は押し、他方は引く。また一方は与え、他方は取り去る。そして与える分だけ増え、取り去る分だけ減る。各々はそれ自身の場所を保持し、小さくなって行くものは小さな場所を指定され、大きくなって行くものは混じり合ってより大きな段階へと進む。異質のものはそぐわないからして、そのそぐわない場所から押し出される。

魂はそれぞれ、より大きい部分を占有することもあれば、より小さい部分を占有することもあるが、それが占める諸部分を行ったりきたりしている。だがそれは〔新たな〕部分の付加も除去も必要とせず、現にある部分の増大と減少に応じて場所を必要としつつ、どこであれそれが入って行くところでそれぞれのことを行ない、また身に降りかかってくるものを受け入れる。なぜなら、そぐわないものがそれと合わない場所にとどまることはできないからである。すなわちそれは思慮分別もなくさまようが、しかし互いに考えを合わせると何に合わさるか認識する。なぜなら同質のものは同質のものに合わさるが、異質のものは争い、戦い、互いに離反するからである。それゆえに、人間の魂は人間の中では成長するが、それ以外のものの中では成長しないのである。他の大きな動物の場合も同様であって、離反し合うものは力づくで分離される。

(7) さて、他の動物についてはさておき、人間について明らかにすることにしよう。火と水の混合を持って魂は人間の中に入ってくるが、それが人体の部分成す。それらは、女のもあれば男のもあるが、多種多様であり、食餌によって養われ成長する。まさにこの食餌によって人間は養われ、成長するのである。入ってくるものがすべての部分を有すること、必然である。なぜならどのような部分であれ、それが始めからその内に存していなかったなら、栄養が多量に加わろうが少ししか加わらなからうが、成長させられることはなからうからである。それは発展し成長するものを持ち合わせていないからである。すべてのものを有しておれば、各々のものはそれ自身の場所で成長するが、それは乾性の水と湿性の火から栄養が加わってきて、そのあるものは内に押し込められ、あるものは外に押し出されることによってである。それはちょうど大工が木をの鋸で挽くがごとくである。一方は引き、他方は押すが、両者は同じことを行なっているのである。下へ抑えつけると、上へ押し返す。なぜなら〈時機を〉外れているのでなければ、〔そのまま〕下へ行ってしまうことはありえないからである。だが無理になされると、すべては損なわれてしまうであろう。人間の栄養とはかくのごときものなのであって、一方は引き、他方は押す。内に押し込められつつ、外に出る。だがその時でもないのに無理強いされると、すべては損なわれてしまう。

(8) 各部分は、可能な限り最大限まで保持する場所がもはや必要な栄養を受け入れることができなくなるまで、それだけの間、同じ段階を保持する。次いでそれは、女のそれも男のそれも、同じ仕方で無理矢理強制的に追い立てられ、より大きな場所に入って行く。どちらであれ、定められた運命を先に成就したものが最初に分離され、そして同時に混ぜ合わされる。なぜならそれぞれはまず最初に分離され、そして同時に混ぜ合わされるのだからである。場所を交換する際に、4度、5度、オクターブの三つの協和を保持して正しい調和を得たものは、以前と同じものによって生き、かつ成長する。だがもし調和を得ず、低い音が高い音と第一の協和〔4度〕によっても第二の協和〔5度〕によってもオクターブによるそれによっても協和を生み出さないなら、一音はずれても調子全体が駄目となる。なぜなら〔その場合には〕ハーモニを生むことはなからうからである。むしろそれらはそのなすところを認識しないがゆえに、定められた時期がこないうちにより大きなところから小さなところへと場所を交換するのである。

(9) ところで男と女のそれぞれがなにゆえに生じるのか、わたしはこれを論が進む中で明らかにするであろう。だがそれらのいずれであっても、生ききて調和を得るなら、それは湿っており、かつ火によって動かされるのである。それは運動しつつ燃え上がり、母体の内に入ってくる食物と氣息から栄

養を収容する。そして最初の未だ稀薄である間は、いたるところ一様であるが、〔やがて〕運動と火によって乾かされ固められる。そして固まると周りが濃縮化され、火は閉じ込められてもはや十分な栄養を引き入れることができず、また周りの濃密さのゆえに氣息を押し出すことができない。そこでそれは内部に存する水分を消費する。ところでその組成体中の本性的に固くて乾いた部分は、火によって栄養として消費されるということではなく、水分がなくなるにつれて強固となり、固まる。これが骨とか健と呼ばれているものである。火は、それと混じり合い運動する水分をもとに、以下のような必然性によって自然に即して身体を整える。火は、〔そこでは〕栄養を持たないがゆえに固く乾いたものを貫いて長い通路を作ることができない。だが湿った軟らかいものを通してならできる。なぜならそれらが火にとっては栄養だからである。だがそういったものの中にも、火によって消費されない乾きが存する。それらは互いに凝縮し合う。そこで最も奥に閉じ込められた火はまた最も多量であり、通路を最も大きくした。なぜならそこには水分が最も多く存していたからである。そしてこれが腹と呼ばれるものである。そして火は、栄養がなくなると、そこから外に出て氣息の通路を作り、栄養を引き込み、方々に分配した。身体の他のところに閉じ込められたそれは（それは火の中で最も湿ったものであったが）、それらの部署に三様の回路を作った。これらが大血管と呼ばれているものである。それらの間に水の残りが集まって固まるが、これが肉と呼ばれる。

(10)一言でいえば、身体中のすべては、火そのものがそれ自らによって適切に秩序づけたのであるが、それは全宇宙の模倣であって、小さいものは大きいものに対応し、大きいものは小さいものに対応している。腹は〔身体中〕最も大きいものであるが、乾性の水と湿性の水にとっての貯蔵庫であって、すべてのものに〔水を〕与え、またすべてのものから〔水を〕取り去る働きをし、それに適合する生き物には養い手であるが、適合しない生き物には破壊者であるという海の機能を持つ。その周りの冷たい湿性の水の組成物は、冷たい氣息と温かい氣息の通路であり、落ち込んでくるすべてのものを変質させる大地の模倣である。そしてそれは消費したり成長させたりしながら、微細な水と空気状の火を、見える見えないを問わず、拡散させ、固まったものから分離させたが、そういった状態にもたらされると、各々は定められた運命によって眼に見えるようになる。その中に火は内の方にも外の方にも互いに限界づけ合う三様の回路を作った。水分の窪みに向うそれらは月の機能を持ち、外の外周、つまり取り囲む塊に向うそれらは星の機能を持ち、真ん中の内の方にも外の方にも（他のものに向って）限っているそれらは（太陽の機能を持つ）。最も熱く最も強力な火が、まさにそれはあらゆるものを支配しているのであるが、各々のものをその本性にしたがって管理するのであって、視覚によっても触覚によってもそれは感知できない。その中に魂、理性、思慮、運動、成長、減少、変異、睡眠、覚醒がある。それはすべてのものをすべてのものを通して操り、これやあれやと決して平静を保つことがない。

(11)人間は、見えるものから見えないものを見定めるということができない。なぜなら人間の本性に似た技術を使用しておきながら、彼らはそのことを認識しないからである。というのも、神々の知性は彼ら自身の能力を模倣するように〔人間に〕教えたのであるが、彼らはそのなすところは認識しているが、何を模倣しているか認識していないからである。すなわち、すべては似ているとはいっても似ておらず、すべては一致しているとはいっても相違しており、対話しているとはいっても対話しておらず、思慮を有しているとはいっても無思慮であり、各人の気持ちは協調しているとはいっても敵対しているのである。というのは、われわれがそれでもってあらゆる事柄を遂行するノモス〔法〕とピュシス〔自然〕は一致しておりながら、一致していないからである。ノモス〔法〕は、どれだけのものについてそれを設定したのか彼らは認識していないとはいえ、人間自身が自分自身によって設定したのであるが、万物のピュシス〔自然〕は神々がこれを整えたのである。ところで人間が整えたも

のは、正しくても正しくなくても、決して同じ状態でありつづけることはないが、神々が整えたものは、正しいものも正しくないものも、常に正しい状態でありつづける。これだけそれらは相違するのである。

(12)技術は、見えるそれであれ見えないそれであれ、明らかに人間のあり様に似ていることをわたしは示すことにする。占い術は以下のようなものである。それは見えるものによって見えないものを、見えないものによって見えるものを、現在あるものによって将来あるであろうものを、死せるものによって生けるものを認識する。そしてその心得ある者は、理解の及ばないものの場合でも常に正しく理解するが、心得のない者は場当たりの理解するに過ぎない。これらは人間の自然本性と生を模倣しているのである。男は女と結びついて子供を儲けるが、見えるものによって見えないこと、すなわち〈懐妊したという〉事実を彼は認識するのであって、そのように人間の未定の判断は見えるものを認識することによってなされるであろう。子供から大人に変わるが、〔その場合でも〕現在によってその将来を知る。死体は生体と同様ではないが、死せるものによって生けるものを人は知る。胃は理解力を持たないが、胃によってわれわれは渴いているとか空腹であることに気づく。占いの技術と人間の本性のあり様は同じなのである。認識力のある者には常に正しく、認識力のない者の場合は場当たりのである。

(13)〔鉄製の道具〕人々は諸々の技術によって鉄を火で溶かすが、それは火を氣息で強いることによってである。〔鉄の内に〕含まれた栄養を奪い去り、きめ粗くした上で、叩いて鍛造する。するとそれは別の水の栄養によって強くなる。人間も体育教師によってそれと同じことをされるのである。氣息によって強いられた火が、内にある栄養を奪い去る。そうやってきめ粗くされた上で、叩いたり、擦ったり、排泄させられたりする。すると別の所から水が誘い込まれて、強くなる。

(14)梳毛職人もまたそういったことを行なう。彼らは踏み、叩き、引っ張る。ひどく取り扱うことによってより強くするのである。飛び出しているところを切ったり、梳き落としたりして、より美しくする。人間もまた同じことをされる。

(15)靴屋は全体を部分ごとに分け、そして諸部分を全体へと纏め上げる。彼らは切ったり縫ったりして、ぐにゃぐにゃになったのをしっかりしたものにする。人間も同じことをされるのである。全体から諸部分が分けられ、諸部分が結合されることによって、それらから全体が生ずる。腐ったところは、医者によって縫ったり切ったりされることによって、治療される。次のこともまた医術のなすところである。すなわち痛む部分を取り除き、それによって苦しんでいたその原因を取り去ることによって、健康を回復させることである。これと同じことを自ら動く自然もまた知っている。坐っているものは立つことを苦痛に感じ、動いているものは休止することを苦痛に感じる。そういった多くのことを自然は医術と共有するのである。

(16)大工が木を挽くとき、一方は押し、他方は引くが、どちらの場合も同一のことをしているのである。抑えつけると上にあがるが、他方は下にさがる。減らしながら、増やしている。彼らは人間の本性を模倣しているのである。氣息を一方は引き入れ、他方は押し出すが、どちらの場合も同一のことをしている。一方は下に押され、他方は上にあがる。ひとつの魂が分かれたれて、多いのと少ないの、大きいのと小さいのが生じる。

(17)建築家は、さまざまに異なるものからひとつのまとまったものを作り出す。乾いたものは湿らせ、湿ったものは乾かし、ひとまとまりのものは分け、分かれているものは結びつける。そうしなければ、あるべき成果は得られないであろう。これは人間の食餌法を模倣するものである。〔食餌法においても〕人は乾いたものは湿らせ、湿ったものは乾かす。またひとまとまりのものは分け、分かれているものは結びつける。これらはすべてさまざまに異なったものでありながら、ひとつにまとまっている

のである。

(18)「望むところを表現するには、まず楽器がなければならない。」同じ音からであっても、音階の並びは同一ではない。それは高い音と低い音から成り、名称の点では同じであっても、音の点では同じでない。最も異なるものが最もよく調和し、あまり相違しないのはあまり調和しない。全体が一樣であるようなものを作るなら、喜びはいまひとつである。最も豊富で最も多彩な変化が人を楽しませるのである。料理人たちは、調和しながらも相違するものからあらゆる種類のものを混ぜ合わせて人々に料理を用意するが、同じものから同じものを作るわけではなく、食物や飲物を人に供す。もし彼らがすべて一樣であるものを作るなら、喜びは得られないであろう。また同一のものにすべてを盛り込むのも適当でないであろう。音楽において奏でられる曲は、ある部分は高く、ある部分は低く奏でられるが、その上に降りかかってくるものの甘さや酸っぱさ、不調和や調和を識別する点で、舌は音楽を模倣する。音は高く、また低く奏でられるが、高い音が低く奏でられるのも、低い音が高く奏でられるのも適当でない。舌もうまく調和がとれていれば調和によって喜びが生じ、不調和だと苦痛が生じる。

(19)皮なめし職人は引っ張り、擦り、梳き、洗う。子供の世話も同じことをする。籠編み職人はまるく編んで行き、出発点から出発点にいたって終る。身体内における循環も同じことである。そこから出発したその点にいたって終る。

(20)金製品を人々は細工する。すなわち叩き、洗い、溶かす。それは強い火ではなく、穏やかな火で組み立てられる。「そのようにして」あらゆる目的に向けて造り上げ、使用する。人間は穀物を叩き、洗い、碾き、火にかけた上で使用する。強い火ではそれは体内において固まらない。穏やかな火によらねばならない。

(21)彫刻家は水と土から身体の模像を作る。最も魂の模像は作ることができないが、すなわち意識を持つものを作ることはできないが。彼らは湿ったものは乾かし、乾いたものは湿らせ、超過しているものからは取り去り、不足しているものには付け加え、ちっぽけなものから長大なものへと増大させて「身体の模像を作るのである」。人間の身にもこれと同じことが起こる。超過する部分からは取り去り、不足する部分に付加し、乾いている部分は湿らせ、湿っている部分は乾かし、ちっぽけなものから極めて大きなものへと人間は成長する。

(22)陶工は轆轤を回すが、それは前にも後にも進まず、同時にその双方に進み、宇宙の回転を模倣している。同じ回転具の中で彼らはありとあらゆる種類のものを作り出すが、同じものから同じ道具によって作られたにもかかわらず、そのいずれも他のものと少しも似ていない。人間やその他の動物の身にもこれと同じことが起こる。同じ循環の中で、湿ったものから乾いたものを作り出し、乾いたものから湿ったものを作り出すことによって、彼らは同じものから同じ器官によってあらゆるものを作り出すが、それらは少しも似ていない。

(23)筆記術は以下のようなものである。すなわちそれは形〔文字〕の組み合わせであり、人間の音声の記号であり、過ぎ去ったものを記憶し、なすべきことを示す能力を持つ。七つの形〔七つの母音〕によって認識は成立する。人間は、文字を知っている者も知らない者も、これらのことをすべて行なう。人間の感覚もまた七つの形によって成立する。音を聞く聴覚、見えるものを見る視力、香を嗅ぐ鼻、快不快を味わう舌、対話する口、接触を感じる体、熱い氣息や冷たい氣息が出入りする通路である。これらを通じて人間に認識は生じるのである。

(24)競技術、体育術は以下のようなものである。彼らはルールに即してルールに反することを、正当に不正することを、騙し、盗み、奪い、暴力を振るうことを教える。すなわち、最も醜きことを最もよきことと教える。これらのことを行なわない者は下手であり、これらのことを行なう者が上手なの

である。これは多くの人々の愚行の列挙である。彼らはこれらの点を観察し、全員の中からひとりを上手、その他の者たちを下手と判定する。多くの人がこれを賛嘆するが、これを心得ている者はわずかである。人々はアゴラにやってきて同じことを行なう。人々は売ったり買ったりするとき、騙す。最も多く騙した者が賛嘆される。飲んで狂乱するときも同じことをする。走り、格闘し、争い、盗み、騙す。全員の中からひとりが上手と判定される。演技術は観客を騙す。彼らはいうことと考えていることが別である。出てきたり出て行ったりするのは同じ人物であり、かつ同じ人物でない。人間の場合でも、いうことと行なうことが裏腹であることがある。同じ人間でありながら、同じ人間でない。ある時にはある考えを持ち、他の時には別の考えを持つ。

このように技術はすべて人間の本性と相通ずるところがあるのである。

2

ヒッポクラテス（『栄養について』IX 98ff. Littré）

(1) 栄養と栄養の種は一であり、かつ多である …。

(2) それ〔栄養〕は各人における〔からだの〕諸部分をその各々の本性と生来の能力とに即して成長させ、丈夫にし、肉をつけ、同じようなものにし、また異なるものにする。

(8) 現に身体を養っているものも栄養であれば、養うことのできるものも栄養であり、将来養うであろうものも栄養である。

(9) 万物の始まりはひとつであり、万物の終わりはひとつである。終わりと始まりは同じである。

(12) それはまた、すべてのものについて温まるのを妨げることもあれば、助けることもあり、冷えるのを妨げることもあれば、助けることもあり、能力を発揮するのを妨げることもあれば、助けることもある。

(14) 体液〔が損なわれ、病気になるの〕は … 偶発的でもあれば、偶発的でもない。われわれの観点からみれば偶発的であるが、原因という観点から見た場合には偶発的でない。原因という点でも、明らかなものもあれば、明らかでないものもあり、また明らかにできるものもあれば、できないものもある。

(15) 自然はあらゆる面において完全に充足している。

(17) それらのすべてがひとつの本性であると共に、ひとつの本性でない。それらすべては多くの本性であると共に、ひとつの本性である。

(19) 栄養をつけるのに薬物を用いるのが極めて良いこともあるし、栄養をつけるのに薬物を用いるのが悪いこともある。悪いとか良いというのは相対的である。

(21) 栄養も、身体を養うことができなければ、栄養でない。栄養でないものも、養うことができるなら、栄養である。名称は栄養でも、働きはそうでなかったり、働きは栄養でも、名称はそうでなかったりすることがある。

(23) 〔体液の〕流れ全体はひとつであり、息全体もひとつであって、すべては共鳴し合っている。肢体全体においてはすべてが、部分部分においては各部における諸部分が、働きに関して互いに共鳴し合っている。

(24) 大始原は末端部へといたり、末端部から大始原へといたる。自然はひとつであり、かつひとつでない。

(40) 調和するものは異なるものであり、異なるものが調和する。他のものからの乳はよいが、自分の乳は悪いこともあれば、他のものからの乳は有害であるが、自分の乳は有益であることもある。

(42) 8 カ月で生まれるものもあれば、生まれないものもある。すなわちこれらの点において、全体的にも部分的にも、もっと長くなることもあれば、もっと短くなることもある。だがより長いものも大幅に長くなることはないし、より短いものも大幅に短くなることはない。

(45) 上り道と下り道はひとつである。

3

テオスのスキュティノス(『自然についてのイアンボス詩』 [4世紀])

1. プルタルコス (『ピュティアは今日では詩の形で神託を降さないことについて』 17 p.402 A)

ゼウスの子、眉目秀麗なるアポロンは、
始めと終わりを一緒にして、その〔リュラの〕全体の調子を合わせ、
太陽の輝ける光を撥とする。

2. ストバイオス (『自然学抜粋集』 I 8,43 p.108,6 W.)

時はすべてのものの最後にして最初なるものにて、
一切を自らの内に有し、
一なるものにして、一なるものでない。常に存在するものから立ち去って行き、
また自らそれとは反対の道をやってくる。
なぜなら明日はわれわれにとり、実際は昨日であり、昨日は明日であるから。

4

クレアンテス (『ゼウス讃歌』断片537,3 - 9 Arnim [ストバイオス『自然学抜粋集』 I 12,p.25 W. による])

大地を取り巻くこの全宇宙は実際御身〔ゼウス〕にしたがい、
御身が導かれる場合には、喜んで御身に支配される。
御身はその打ち勝ち難き手に、あのように有用な
永遠に生きる両刃の火の雷を有したもう。
けだしその一撃によって自然のすべては身震いし、
それによって御身は
大小の光に混じって万物に浸透する共通なるロゴスを正したもう。

5

ルキアノス (『命の競売』 14)

買い手 他方、お前はといえば、なぜそのように泣き叫んでいるのか。というのも、お前に話しかける方がはるかによいと思われるからだ。

ヘラクレイトス おお客人よ、人間界のことは痛ましく哀れであって、亡ぶべく定められていないものはそれらの中には何ひとつないとわたしは考えるからだ。それゆえにわたしは彼らを憐れに思い、悲しむのである。だが現在ある悲しみを大きいとはわたしは考えない。将来起こるであろうそれはまったく悲惨なものとなろう。つまりわたしのいうのは世界大火と宇宙の運命である。このことをわたしは悲しむのであり、確固たるものは何もないがゆえに、すべては混合酒に混ぜ合わされているがごとくであり、喜びと悲しみ、知と無知、大と小、上と下は同じであり、永遠の戯れの内を巡り、交替しているのだ。

買い手 ところでその永遠とは何なのかね。

ヘラクレイトス 遊ぶ子供、将棋する子供、仲良くしたり、争ったりする子供さ。

買い手 では人間とは何か。

ヘラクレイトス 死すべき神々。

買い手 では神々とは。

ヘラクレイトス 不死なる人間さ。

買い手 おい、お前は謎をいつているのか。謎掛けをしているのか。まったくアポロンのように、何も明らかに語らないではないか。

ヘラクレイトス 君たちのことなど小生には何の関心もないからね。

買い手 それじゃ、正気の者は誰もお前を買わないだろうね。

ヘラクレイトス 成人に達したすべての者に嘆き叫ぶようわたしは命じる。買う者にも、買わない者にも。

買い手 やれやれ、この困り者はほとんど憂鬱病だな。